

山形で体感、新循環スタイル。

第3回

スリーアール

3R推進 全国大会

報告書

平成20年

10/23^木日▶26^日



主 催

第3回3R推進全国大会実行委員会

環境省、山形県、山形市、3R活動推進フォーラム、山形県商工会議所連合会、
山形県消費生活団体連絡協議会、社団法人山形県産業廃棄物協会、社団法人日
本自動車販売協会連合会山形県支部、山形県環境保全協議会

目次

1.大会概要

大会報告

第3回3R推進全国大会実行委員会 委員長 細谷 知行(山形県文化環境部長) 2

後援

2

大会シンボルキャラクター

3

開催スケジュール

3

2.大会式典

式典プログラム

4

挨拶 環境大臣……………齊藤 鉄夫

5

山形県知事……………齋藤 弘

6

山形市長……………市川 昭男

7

山形県議会議長…阿部 信矢

8

表彰式

9

特別講演「循環型社会の実現に向けて～もったいないのは何か～」

3R 活動推進フォーラム会長 小宮山 宏(東京大学総長)

11

記念講演「俳句でエール！～小さな言葉が大きな力～」

黛 まどか(俳人)

21

歓迎アトラクション

28

大会宣言

28

3.開催 イベント

やまがた環境展

29

やまがた環境展 レイアウト

31

地域循環圏を考えるシンポジウム

環境省中央環境審議会循環型社会計画部会

33

エコツアー

34

映画「アース」上映会

34

4.関連 イベント

もったいないやまがた 780 大会

35

こども環境学習教室

35

こどもエコクラブ交流会 in やまがた

36

エコ杯やまがた

36

東北バイオマス研修会 in 山形

37

県内縦断エコドライブオリエンテーリング

37

エコライフやまがた '08

38

シャトルバス

40

託児サービス

40

5.資 料

ポスター

41

チラシ

42

リーフレット

43

大会式典プログラム

44

ホームページ

44

第3回3R推進全国大会実行委員会設置要綱

45

1.大会概要

●大会報告

第3回3R推進全国大会実行委員会

委員長 細谷 知行(山形県文化環境部長)

今を生きる私たちが次の世代を担う子どもたちへ美しい環境を引き継いでいくためには、県民、事業者、行政が一体となって資源の消費を抑制し、環境への負荷を少なくする3R活動をさらに進めていく必要があります。このため、本県では平成18年度から27年度までの10年間における3R推進のための基本計画となる「山形県循環型社会形成推進計画～ごみゼロやまがた推進プラン～」を策定し、「全国一ごみの少ない県」と「循環型産業の振興」を基本目標として各種施策に取り組んでいるところです。

このたび、3Rの推進に対する理解を深め、ごみゼロ社会の実現や循環型社会の形成に向けた取り組みを推進することを目的として、第3回3R推進全国大会が10月23日(木)から26日(日)にかけて山形県で開催されました。

23日(木)の「地域循環圏を考えるシンポジウム」の開催を皮切りに、24日(金)は本大会のメインとなる「大会式典」の開催と3日間にわたる「やまがた環境展」の開幕、続く25日(土)には「映画『アース』上映会」と「エコツアー」を実施いたしました。さらに、山形県や関係団体による関連イベントも多数開催され、大会期間中は県内外から4万5千人を超える方々にお越しいただきました。

「大会式典」では、斉藤鉄夫環境大臣から循環型社会形成推進功労者表彰等が受賞者に授与さ

れ、環境大臣を囲んでの記念撮影も

行われました。また、特別講演として3R活動推進フォーラム会長の小宮山宏氏(東京大学総長)に、記念講演として俳人の黛まどか氏に、ご講演いただきました。会場は大勢の方々に埋め尽くされ、第2会場も多くの方に参加していただくという状況で、大変華やかな式典になりました。

「やまがた環境展」では全国から100を超えるブースが出展し、それぞれが工夫を凝らした環境関連製品の展示や技術の紹介をしていたき、賑わいのあるイベントとなりました。

このたびの全国大会の開催は、来場者にとっては3Rをはじめとした環境活動へ取り組む契機になるとともに、県内の取組みを全国に発信する絶好の機会になりました。本大会を一過性のイベントとすることのないよう、循環型社会の形成に向けて、今後も着実に推進してまいりたいと考えております。

第3回3R推進全国大会は、多くの方々のお蔭をもちまして、無事終了することができました。開催にご協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、今後の3R活動のさらなる発展を祈念しまして、大会報告いたします。



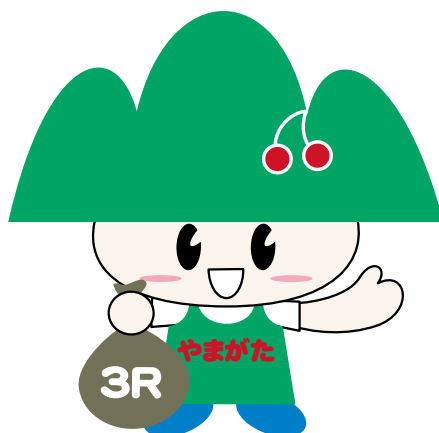
1

大会概要

●後援

山形県教育委員会、山形県市長会、山形県町村会、山形市教育委員会、社団法人山形県建設業協会、山形県商工会連合会、山形県中小企業団体中央会、山形県農業協同組合中央会、財団法人山形県企業振興公社、財団法人山形県産業技術振興機構、山形県工業会、山形新聞・山形放送、朝日新聞山形総局、毎日新聞山形支局、読売新聞東京本社山形支局、日本経済新聞社山形支局、産経新聞社山形支局、河北新報社山形総局、NHK山形放送局、山形テレビ、テレビユー山形、さくらんぼテレビ

●大会シンボルキャラクター



ごみゼロやまがた県民運動キャラクター
「ごみゼロくん」

●開催スケジュール

■日程……………平成20年10月23日(木)～10月26日(日)

■会場……………山形国際交流フラザ(山形ビッグウイング)ほか

会 場		10月23日(木)		10月24日(金)		10月25日(土)			10月26日(日)	
		AM	PM	AM	PM	AM	PM		AM	PM
山形国際交流プラザ	多目的集会展示場 (1F) 交流ホール(1F)			第3回3R推進全国大会やまがた環境展						
	イベント広場 (屋外)			エコライフやまがた'08						
	大会議室(2F)				第3回3R推進全 国大会式典	映画 「アース」 上映会	東北バイオ マス研修会 in山形	映画 「アース」 上映会		もったいないや まがた780大会 ～3 R推進シン ポジウム～
	交流サロン(2F)				同上(第2会場)	もったいないやまがた780大会 ～おもちゃのかえっこバザール、環境科学体験～				
	中会議室(4F)					エコ杯やまがた				県内縦断エコドライブ オリエンテーリング
	研修室(4F)						こどもエコクラブ交流会 inやまがた			こども環境学習教室
別会場	ホテル メトロポリタン 山形		地域循環圏を考 えるシンポジウム ／環境省中央環 境審議会循環型 社会計画部会							
	先進取組事例 視察ツアー					エコツアー ①山形市内半日コース ②最上地域1日コース				

2.大会式典

●式典プログラム

- 日程……………10月24日(金) 13:30～16:30
- 会場……………山形ビッグウイング 大会議室、交流サロン
- 入場者数……630人

(敬称略)

歓迎アトラクション	山形県立山形西高等学校合唱団 曲名(青い鳥、寂庵の祈り、最上川)
	出羽三山神社山伏
挨拶	環境大臣 齊藤鉄夫
	山形県知事 齋藤 弘
	山形市長 市川昭男
	山形県議会議長 阿部信矢
表彰式	循環型社会形成推進功労者等表彰
	3R促進ポスターコンクール表彰
特別講演	小宮山 宏 (3R活動推進フォーラム会長・東京大学総長) 「循環型社会の実現に向けて～もったいないのは何か～」
記念講演	黛 まどか (俳人) 「俳句でエール！～小さな言葉が大きな力～」
大会宣言	東根市立高崎小学校児童
閉会挨拶	山形県文化環境部長 細谷知行 (第3回3R推進全国大会実行委員長)

●挨拶

斉藤 鉄夫(環境大臣)

只今ご紹介をいただきました環境大臣の斉藤鉄夫でございます。大会の開会にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

本日は、第3回3R推進全国大会が、ここ山形県において、全国から大勢の皆様方のご参加を得て盛大に開催されますことに、心からお喜び申し上げます。また本日、循環型社会形成推進功労者表彰を受けられる皆様、及び3R促進ポスターコンクールで選ばれました小・中学生の皆様に対しまして、心からお祝いを申し上げます。

本大会は、循環型社会の形成に向け、リデュース・リユース・リサイクルの3Rを推進することを目的として、年に一度開催されております。国民・企業・NGO・NPO・自治体の皆様など、幅広い関係者が一堂に会し相互理解を深め、具体的な取り組みを、全国、そして世界に発信し広げていくための、極めて重要な機会と考えております。本年の開催地であるここ山形県は、最上川や出羽三山の自然に育まれた恵み豊かな地域ですが、循環型社会という観点から見しても、一人当たりのゴミ排出量が全国でも有数の少なさであり、間伐材等のバイオマス資源の有効活用も進んでいるなど、『もったいない』の精神や自然と共生する文化が根付いた土地と伺っております。

しかしながら、我が国全体として見れば、依然として大量のゴミの排出が続いており、最終処分場の逼迫や不法投棄などの問題が深刻化しております。また世界に目を転じますと、中国・インドなどの新興国の経済成長を背景として、資源の価格が高騰しており、経済活動への影響も懸念されております。

大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会から、循環型の社会に転換していく必要性が、これま

でにも増して高まっております。

循環型社会を形成するためには、地域それぞれの特徴を生かし、バイオマスなどの資源の循環を実現する足元からの取り組みが重要です。また、都市鉱山という言葉があるように、携帯電話などの電気・電子機器の廃棄物には多くの希少金属が含まれており、この回収リサイクルを進めることも重要になっております。環境省といたしましては、こうした循環型の地域づくりや希少金属回収の取り組みを、各種のモデル事業などによって強力に進めて行きたいと考えております。また、本日表彰を受けられる山形県長井市のレインボーランをはじめとした各地の優れた取り組みが、全国に発信され広まっていくよう努めて参ります。

こうした循環型社会づくりの取り組みを前進させるためには、市民・事業者・地方公共団体・国などの全ての関係者が手を携えて取り組んでいくことが不可欠です。今大会にご参加いただいた皆様におかれましては、3Rの推進に向けて、一層のご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、開催にあたりご尽力いただきました齋藤知事をはじめ、山形県、山形市の皆様方と、会長をお務めいただいている小宮山東京大学総長をはじめとする3R活動推進フォーラムの関係者の皆様方に心より御礼を申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。



●挨拶

齋藤 弘(山形県知事)

第3回3R推進全国大会を開会するにあたりまして、全国各地より多数の皆様からお出でいただきましたこと、主催者を代表いたしまして、そしてまた、山形県民を代表いたしまして、心より歓迎申し上げます。

この3R推進全国大会、待ちに待ったというのが私の気持ちでございます。約2年前に山形での開催の話があった時に、ちょうど開催する年にはサミットがあり、おそらく環境がテーマになるのではないかとわれ始めていました。こうした時期に山形で3R推進全国大会が開かれ、そしてこの“山形で体感、新環境スタイル”というテーマを情報発信できるということは、この上もない喜びでありますし、大変意義深いことだと思っております。第3回の3Rですから、“3”と数字が随分連なっております。そこで“3”に因んだ環境問題について、3つほど皆様にご紹介したいと思います。

まず、山形県が誇る自然資産。その代表格は何といっても湯殿山、月山、羽黒山の出羽三山であります。ここでは信仰が生んだ精神文化を、これまで高く育み続けてきました。関八州にまでその信仰に治め、そして最上川の舟運がその文化を支えてきました。それだけに、これからの環境問題などを考える時に、こうした自然資産を、ゴミの山として次世代に伝えていくということは決してあってはならない。我が山形県民の共通した思いではないかと思えます。こうした何千年も続いてきた自然資産を、是非とも次の世代にも伝えていきたい、つないでいきたいという思いであります。

それから、“3”に因んだテーマの2番目ですが、山形県は3世代同居率が全国トップでございます。約4家族に1家族は、おじいちゃん、おばあちゃん方と暮らしている。それだけに今、世の中で欠如が話題になっている“絆”というものが、この山形県では引き続き根強くあります。助け合って、分かち合って、そして育み合う。この絆の精神が、山形では根付いています。したがって、環境問題についても、そうしたお互いの助け合い、育み合いという、この精神こそが大変重要であるし、行政もちろん支援をいたしますが、基本は住民1人ひとりの取り組

みであろう。お互いにお互いを気遣い合い、助け合い、

支え合いながら生活している我が山形県は、この環境問題を扱う先進県として、とても全国に誇れるのではないかと思います。ちなみに、1人当たりのゴミの排出量は、884gということで、全国一少ない地域であります。そしてまた、レジ袋有料化という取り組みも、今年から山形県でも始まりましたが、あっという間に全県下に広がり、今や98%のお客様が自らのマイバッグを持って買い物に来られるなどということが報ぜられております。

そして、“3”に因む3つ目でございますが、今年度、山形県では3つの県民運動を展開しております。1つは、子供たちが命を大切にし、食に対して感謝するという「食育」を県民運動として展開していくこと。それから、「最上川の世界文化遺産登録」に向けて頑張ること。今回残念ながら、日本の暫定リスト入りは逃しましたが、課題がはっきりと指摘され、それさえクリアされれば暫定リストに掲載されるというところまで行き着いております。自らの地域をよく知り、誇りに思えるようなこの運動を是非とも続けていきたい。このことが、これからの環境問題についても、必ずや功を奏すと思います。そして、3つ目の県民運動は、もちろん「地球温暖化防止対策」で、これは言うに及びません。

こうして、第3回目の3R推進全国大会が山形県で開かれるということは、只今申し上げたような3つの意味でも、とても意義のあることだと改めて思う次第でございます。この開催期間が皆様にとって有意義なものでありますように。そして、我が国、我々の地球全体が、環境を大切にしていこうという意識で大きく包まれますことを、心からご祈念申し上げまして、主催者としてのご挨拶に代えさせていただきます。

本日は、本当に多くの方々にお集まりいただきまして、ありがとうございます。



●挨拶

市川 昭男(山形市長)

全国各地より多くの皆様をお迎えし、第3回3R推進全国大会を盛大に開催できますことは誠に喜ばしく、遠路お越しいただきました皆様方を山形市民とともに心より歓迎を申し上げます。また、本日表彰を受けられる皆様方には、長年に渡る3R活動へのご功績に対し深く敬意を表しますとともに、心からお祝いを申し上げます。

さて、地球温暖化やそれに起因すると言われていた異常気象など、地球規模での環境問題が叫ばれている中であって、ゴミの減量やリサイクルの推進は、豊かな環境を後世に受け継いで行くために、避けては通れない重要な課題であります。私達の生活は限りある資源に支えられており、この限りある資源を未来の子供たちに受け継いで行くためには、これまでの大量生産・大量消費・大量廃棄という使い捨ての社会から、循環型社会へ移行していかなければなりません。そのためにも、ゴミを減らすリデュース、繰り返し使うリユース、再び資源として利用するリサイクルの3Rを、社会全体で実行していく必要がございます。

現在山形市では、環境・産業経済・地域社会の3つの視点から、持続可能な循環型社会の形成に向けた街づくりに取り組んでおり、特に環境にやさしい暮らしづくりを重点課題のひとつとして位置づけ、各般の施策を鋭意推進している所でございます。その取り組みのひとつとして、市民団体とスーパー等の事業者、そして山形市の3者で協定を締結し、今年の7月よりレジ袋の無料配布の中止を実施しております。現在、実施店舗が10社41店舗に拡大しており、開始以来のマイバック持参率は90%以上という高い数値を維持しております。さらには、これも7月から本格稼働いたしました、本市の中心部である七日町商店街振興組合が、バイオディーゼル燃料の製造装置を設置し、飲食店などから出る使用済みの食用油を、バイオディーゼル燃料に再生し供給する取り組みを始めております。

このように本市では、市民・事業者・行政が連携し、それぞれの役割を分担し合いながら、循環型社会の構築に取り組んでおりますが、こうした

中、この3R推進全国大会が本市を会場に開催されま

すことは、誠に意義深く、参加者お1人お1人が3Rの推進に理解を深められ、自らのライフスタイルを見直す契機となる実り多い大会となりますようご期待を申し上げます。そして、せっかくの機会でございますので、全国各地から参加されました皆様に、山形を大いに楽しんでいただけたらなという風に感じております。

意外に感じられたかと思いますが、山形市は雪国でありながら夏は大変暑く、昭和8年に本市で観測された40.8度は、昨年埼玉県熊谷市と岐阜県多治見市で40.9度が記録されるまで、実に74年間、日本の最高気温として記録されておりました。また、蔵王の樹氷、“スノーモンスター”に代表されるように、冬の寒さも厳しく、山形は夏冬の寒暖の差が大きく、四季の移り変わりがはっきりとした町でございます。こうした気候の特徴が、たくさんの恵みを与えてくれる豊かな自然を育み、果物王国と呼ばれるゆえんのサクランボ、ラフランスをはじめとする豊富な果物や、そば、山形牛など、全国に誇れる食をもたらし、秋の風物詩として名高い芋煮などの様々な固有の食文化を作り上げております。今山形はまさに豊穡の秋を迎えております。どうぞこの機会に、山形の風土と歴史、そして自慢の食を堪能していただき、秋の山形を満喫していただきたいと存じます。

それでは、最後になりますが、今大会の開催にあたりご尽力賜りました環境省、山形県、そして、3R活動推進フォーラムをはじめとする関係者の皆様に心から感謝を申し上げますとともに、本日ご参会の皆様方のより一層のご活躍とご健勝をご祈念申し上げ、開催市としてのご挨拶とさせていただきます。



●挨拶

阿部 信矢(山形県議会議長)

第3回3R推進全国大会の開催にあたり、開催地の山形県議会を代表いたしまして、お祝いの言葉を申し上げます。“山形で体感・新環境スタイル”を合言葉に、全国からこのように多くの皆様の参加をいただき、3R推進全国大会が、ここ山形県で開催されることをお喜び申し上げますとともに、心から歓迎を申し上げます。また、3R活動の推進にご尽力され、循環型社会形成推進功労者表彰を受賞される皆様、そして、3R促進ポスターコンクールで入選し、表彰を受けられる皆様、誠におめでとうございます。衷心からお祝いを申し上げる次第でございます。

さて、我が国はこれまで、大量生産、大量消費、そして大量廃棄型の社会を作り上げることによって、豊かで便利な生活を実現するに至りました。しかしながら、その結果として膨大なゴミの排出による様々な環境への負荷が深刻化し、さらには、天然資源の枯渇までもが懸念される状況に至っております。その解決を図るには、3R活動をより一層推進し、早急に循環型社会を構築して行くことが何よりも肝要であると存じております。

山形県内でも、スーパーのレジ袋の無料配布中止などにより、マイバッグを活用する気運が高まっており、またここ山形市では、家庭ゴミ回収の有料化の動きとともに、中心商店街などの廃油をもとにしたバイオディーゼル燃料を利用し、ゴミ収集車の運行を実施しているとお聞きしております。

今大会は、このような山形県内の環境に対する取り組みを全国に発信することはもとより、全国の先駆的な取り組みを見て、触れて、学習する絶好の機会であると認識しております。そして、今大会を契機として、官・民が一体となった3R活動の気運が一段と高まり、さらなる循環

型社会の醸成に繋がれば何よりで

あると、ご期待を申し上げる次第であります。

終わりにになりますが、本大会の開催にあたり大変なご尽力を賜りました環境省をはじめ、開催地の山形市、そして3R活動推進フォーラムの皆様に対し、心から感謝の意を申し上げますとともに、全国からお集まりの皆様のご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。



●表彰式

循環型社会形成推進功労者等表彰

循環型社会形成推進功労者等表彰は、先駆的または独創的な取り組みにより、循環型社会の形成について顕著な成果を上げている個人、企業または団体の方々に環境大臣から表彰するものです。

今年度は個人6名、NPO等の15団体および企業28社が受賞されました。



■3R活動優良企業

- パナソニック電工帯広株式会社**(北海道)
成形工程で発生する廃プラスチックを削減し、廃棄物の発生を最小限に抑える取り組みを実施するなど、3R推進に貢献。
- 株式会社 町村農場**(北海道)
家畜排せつ物を処理して有機肥料として農地に還元、処理の際に発生するバイオガスを燃料に発電するなど、3R推進に貢献。
- 太平洋セメント株式会社 大船渡工場**(岩手県)
廃棄物のセメント資源化による適正処理の実現などにより、循環型社会の形成推進に貢献。
- 東北日本電気株式会社**(岩手県)
地域におけるゼロエミッション推進活動に先導的な役割を担い、循環型社会の形成推進に貢献。
- 横手運送株式会社**(秋田県)
生ごみのリサイクルによるコンポストを使用した環境に配慮したエコフードの栽培・販売で、循環型システムの普及・促進に貢献。
- 東北エブソン株式会社**(山形県)
事業活動で発生する廃棄物の再資源化率100%の達成、半導体業界初のフッ酸の再資源化など、循環型社会形成推進に貢献。
- 花王株式会社 栃木工場**(栃木県)
産業廃棄物のゼロエミッションの継続、そのリデュース、リユース、リサイクルにより、3R活動の推進に貢献。
- 有限会社 ドンカメ**(栃木県)
生ごみの堆肥化や農家と連携した学校給食への農作物の供給等、町独自の食の循環システムの確立に貢献。
- 株式会社 東亜オイル興業所**(千葉県)
廃油から再生重油及びコンクリート剥離剤を製造することによりリサイクル事業を実施し、循環型社会の推進に貢献。
- 五洋建設株式会社**(東京都)
職員・協力会社・処理会社等現場の3R活動に積極的に取り組むなど、3R推進に貢献。
- 株式会社 リーテム**(東京都)
長く資源循環の規範的な取り組みを行い、3R推進・普及活動を展開、業界のリーダー的存在として循環型社会形成に貢献。
- 株式会社 北陸リサイクルセンター**(石川県)
飲料容器の再商品化について事業系または行政分を加え活動、リサイクル国内循環の一翼を担い、再生利用の向上に貢献。
- 福井環境事業株式会社**(福井県)
最新の選別システムの導入によるプラスチックの資源化に取り組むなど、多年にわたり3R推進に貢献。
- 小柳産業株式会社**(長野県)
永年にわたりリサイクルを主体に地域社会とともに環境保全に取り組むなど、循環型社会形成推進に貢献。
- 西濃建設株式会社**(岐阜県)
建設廃棄物リサイクル事業、下水汚泥リサイクル技術開発の積極的取り組みと使用を通して循環型社会形成に貢献。
- 岩谷興産株式会社**(三重県)
エココンテナの開発・販売により、保管物の劣化防止によるリサイクル効果の向上に寄与するなど、3R推進に貢献。
- エス・エヌ・ケー・テクノ株式会社**(三重県)
産業廃棄物(廃油、廃液等)を燃料化、セメント焼成用補助燃料として安定・継続的に供給し、循環型社会形成推進に貢献。
- 株式会社 京都環境保全公社**(京都府)
廃プラスチック、紙くず及び下水汚泥のリサイクル推進に努め、その普及啓発に尽力するなど、3R活動推進に貢献。
- 宝酒造株式会社 伏見工場**(京都府)
廃棄物の分別回収の徹底、排水余剰汚泥減容化等に取り組み、経年的に再資源化率99%以上を達成し、3R推進に貢献。
- 日立マクセル株式会社 京都事業所**(京都府)
磁気テープ屑の建材材料化や廃プラスチックの固形燃料化により経年的に再資源化率99%以上を達成し、3R推進に貢献。
- 新日本開発株式会社**(兵庫県)
燃え殻の全量セメント原材料化、成分調整した混合廃棄物のセメント燃原料化など、循環型社会形成推進に貢献。
- 有限会社 山陰クリート**(鳥取県)
発泡スチロールの油化還元、廃プラスチックの固形燃料化など、3R推進に貢献。
- 鈴木工業株式会社**(岡山県)
食品工場等から発生する無機汚泥に生石灰等を加え、消石灰製品等を製造する技術確立、3R推進に貢献。
- 田川産業株式会社**(福岡県)
「漆喰」をベースにした独創的な手法により、石灰灰等を内装用建材にリサイクルする技術を開発、実用化、3R推進に貢献。
- 株式会社 フコク**(福岡県)
ポリエステル不織布端材を自動車床下吸音材等とする技術及び製造工程を確立し、廃棄物発生抑制に貢献。
- 株式会社 環境総合技術センター**(熊本県)
生ごみを発酵・乾燥、肥料にして野菜づくりを行う完全循環型食品リサイクルシステムを実現し、循環型社会形成推進に貢献。
- 日本フィルム株式会社**(大分県)
「ごみ袋は資源バッグ」という理念のもと、環境と人に配慮した製品開発を推進し、ごみ減量化等に貢献。
- 大口酒造株式会社**(鹿児島県)
酒造(焼酎)メーカーとして900ml茶びんのリユースシステムの構築、ガラスびんリユースの普及に尽力、3R活動推進に貢献。

■3R活動推進功労団体

- 協業組合 タイセイ(秋田県)
建造物解体に伴う廃木材をチップ化、バイオマスボイラーの燃料に利用する等、廃木材の再生利用(リサイクル)に貢献。
- 長井市／レインボープラン推進協議会(山形県)
生ごみを分別・堆肥化、その堆肥で生産した農産物を消費するリサイクルシステムを推進、循環型社会形成に貢献。
- P&Pトレーリサイクル研究会(山形県)
ヨコタ東北を中心に地元スーパー及び福祉施設等が連携し、食品トレーの再生再利用を行うなど、3R推進に貢献。
- 富山県レジ袋削減推進協議会(富山県)
全国で初めて県内全域のスーパーマーケットなどにおいてレジ袋の無料配布取止めに踏み切るなど、3R推進に貢献。
- 敦賀市消費者連絡協議会(福井県)
永年にわたりごみ減量化等の普及啓発を行い、レジ袋削減の取り組みにも主導的な役割を果たすなど、3R活動推進に貢献。
- 菅山区(静岡県)
紙類ごみのリサイクル活動を行う雑紙減量大作戦を展開し、地域住民に廃棄物削減の意識を広めるなど、3R活動推進に貢献。
- 小牧市女性の会(愛知県)
3R運動が注目される以前からリサイクル問題に着目し、さまざまな活動を展開、循環型社会の形成推進に貢献。
- 特定非営利活動法人 中部リサイクル運動市民の会(愛知県)
永年にわたり、リサイクル運動の推進、環境商品の開発普及等に主導的な役割を果たすなど、循環型社会形成推進に貢献。
- NPOとばりサイクルネットワーク(三重県)
「鳥羽市リサイクルパーク」を設立時から主体となって管理・運営、家庭ごみのリサイクルなど、3R推進に貢献。
- 相生市消費生活研究会(兵庫県)
兵庫県の5Rの取り組みに先駆け、先進的にマイバッグ持参運動に取り組み、レジ袋無料配布中止によるレジ袋の削減に貢献。
- 倉敷市環境衛生協議会水島地区協議会(岡山県)
ごみ減量化などの3R推進をスローガンに、ごみゼロキャンペーンなどの運動を永年にわたり行うなど、3R活動の推進に貢献。
- 特定非営利活動法人 津山市消費生活モニター連絡会(岡山県)
“環境を守ることは生命(いのち)を守ること”を基本理念にリサイクルなどの活動を展開、循環型社会形成推進に貢献。
- 特定非営利活動法人 21世紀の森林づくり(福岡県)
スギの間伐材等の低位利用材を活用した「オール木質材パレット」を開発し、3R推進に貢献。
- 特定非営利法人 伊万里はちがめプラン(佐賀県)
生ごみや廃食油を捨てる側の料飲店組合・旅館組合が主体となり、資源として活用する取り組みを行い、3R活動推進に貢献。
- さざぼエコプラザ(長崎県)
廃校となった小学校校舎を再利用し、粗大ごみ補修譲渡等機能を兼備した市民協働型運営を行い、循環型社会形成推進に貢献。

■3R活動推進功労個人

- 矢羽羽子(北海道)
古紙、ダンボール、空き缶等回収運搬の実践、普及啓発活動を通じ、循環型社会の形成と障害者の自立支援社会参加に貢献。
- 戸部 昇(東京都)
東京包装容器リサイクル協同組合の副理事長としてPETボトル等の回収システムを構築し、東京都内の自治体分別回収に貢献。
- 彦坂武功(神奈川県)
永年にわたり、業界団体のトップリーダーとして、廃木材のリサイクル推進に取り組み、循環型社会の形成に貢献。
- 小六信和(岡山県)
古紙のリサイクル教室を開催し、自ら講師として学校等を訪問してリサイクル思想の普及啓発に取り組むなど、3R活動推進に貢献。
- 板東 昭(徳島県)
建設系産業廃棄物(木くず、がれき類)の再生利用を推進、業界団体役員として廃棄物の発生抑制と循環的利用促進に貢献。
- 立山 貢(長崎県)
全清連加盟400余会員企業に対する循環型社会づくり・3R推進に関する普及啓発活動を展開するなど、3R活動推進に貢献。

3R促進ポスターコンクール表彰

3R促進ポスターコンクールは、小学生、中学生を対象に過剰包装の抑制、リユースカップの活用、リサイクルへの協力など、『3R』、すなわち排出抑制のリデュース、再使用のリユース、再生利用のリサイクル、これらを通じて循環型社会の構築を推進することをテーマとしてポスターを募集し、優秀作品に選定された方々を表彰するものです。

小学生低学年の部

石巻市立稲井小学校3年
岡 香 里 (宮城県)

小学生高学年の部

山武郡九十九町立豊海小学校6年
浅 野 一 聖 (千葉県)

中学生の部

ひたちなか市立大島中学校2年
武 石 真 由 (茨城県)

●特別講演 「循環型社会の実現に向けて～もったいないのは何か～」

3 R 活動推進フォーラム会長

小宮山 宏(東京大学総長)



受賞された皆様、本当におめでとうございます。

一昨年は最初に名古屋で、去年は北九州で、今回3回目の全国大会は山形で開催させていただきました。3 R 活動が次第に発展していることを感じ、大変うれしく思っております。

今、循環型社会と言うのは、随分市民権を得てきたと言えますが、一方でリサイクルに関しては、「リサイクルしてはいけない」という本が出版されるなど、様々な議論があることは事実です。今日お話ししたいのは、長期に向けて、長期と言っても100年だとか1万年だとかいう話ではなくて、50年や100年、そういった長期に向けての人類の向かうべき方向というのは循環型社会である、ということを示し明確にしてみたいと思います。

さきほど環境大臣もおっしゃってありました“もったいない”という言葉。“もったいない”というのはとても大事な良い言葉で、なかなか英語に訳せない、少なくとも一言で相当する英語は無いのではないかと思います。そのように、非常に日本の良い文化を表す言葉なのですが、もったいないのは何か、要するに、物かエネルギーか。ここのところを、よく考えてみたいと思います。



今の21世紀、私は人類にとって非常に節目になる世紀だと思います。どういう意味かというと、人間にとって地球が小さくなってしまったというこ

とです。これ

が一番大きな問題で、21世紀というのは、小さくなってしまった地球で、人間がどのようにして“もったいない”と思いながら生きていくのかということだと思います。

今、世界は経済クライシスで大変ですよね。株価が世界的には半分ぐらいになったりして、大変な問題ですが、これも地球が小さくなったことの一つの表れです。つい最近まで、例えばメキシコで主食のとうもろこしの値段が3倍になったり、エンゲル係数が70まで上昇したりしました。また、ベトナムなどの国でお米の値段が暴騰し、今はまた暴落している。しかし、江戸時代から小豆相場とか米相場なんてあったわけです。ただそれは、ある商人が大きな得をしたり、大きな損をしたり、小さな国のごく一部で、小規模に起こっていた現象でした。ところが、今は、情報がインターネットを通じて、一瞬にして世界を回ります。そして一瞬で、お金も世界を巡ります。

なぜこんなに地球が小さくなったのか。それは20世紀に人口が3.5倍に増えたからです。それから、3大穀物のお米、小麦、とうもろこしの生産量は、不思議なことに3つとも同じで、それぞれ今6億tぐらい世界で生産されていますが、20世紀の間に7.5倍に増えている。エネルギー消費量は20世紀の間に20倍くらい大きくなった。しかも、20世紀の後半に急激に増えてきているのが一目瞭然でしょう。それに併せて二酸化炭素の濃度も上がってきた。人口が増えて、1人1人が裕福な生活をしだして、基本的な地球の数値である二酸化炭素の濃度というものが、急激に上がり出した。空も海も大地も人間にとっては無限ではなくなってきた。大海原でも母なる大地でもなくなってきたのです。昔だったら、食べたゴミなんていうのは放っておけば野良犬が食べたり、キリギリスが食べたりして、最後には土壌の微生物が分解して土に戻った。そういう意

味で、大地は人間にとって無限大だった。資源も、掘ってみたら石油が出てきて、アメリカンドリームとして大金持ちになったりしていたわけですけど、もうそんなフロンティアは、地球上には無い。地球というものが、資源もそうだし、環境もそうだし、人間の動きにとってもそうだし、お金や情報の動きにとっても小さくなった。この間、民主党大会でオバマ氏が“finite earth（有限の地球）”という言い方をしていましたけど、これが21世紀の新しいパラダイムの1つです。

もう1つは社会の高齢化です。日本は高齢化が世界中で一番進んでいるけれど、他の国もすぐ追いかけてきます。日本は、2006年に人口がピークを迎えました。中国は2025年から2030年ぐらいに人口のピークを迎えます。先週、インドの教育大臣のシンさんという方に聞いたら、インドは恐らく2035年から40年ぐらいがピーク。インドというのは今一番若い国ですが、それでももうすぐ高齢化を迎えるのです。21世紀の前半に、世界がなぜ高齢化するのか。1つは、医療が進歩して長生きできるようになったということでしょう。それからもう1つは、教育が普及し子供が少なくなったことです。今でもアフリカあたりでは、6人7人もの子供がいます。日本でも数十年前にはそういう時代があったわけですが、教育が進むと子供の数が少なくなるのは、もう世界のトレンドです。日本では、2人で産む子供の数が1.34人ということでしたけれども、韓国は1.1だし、中国だって一人っ子政策が成功しているから1.1と言われている。ドイツが1.3、イタリアが1.2くらいです。世界の国は、このようにして高齢化していきます。

社会の高齢化と、有限の地球ということが21世紀の基本的な背景です。この中でどのようにして生き生きとした社会をつくっていくか、というのが人類の課題です。日本というのは、まさに先陣を切っていますから、これをプラスにしていくような良い社会のモデルをつくれれば、それが21世紀の世界のモデルをつくることになる。それが先進国ということです。

それでは、そういうものを考えるには、少し長い目で見ないといけな。今、過去100年というのを見てみました。20世紀っていうのは過去100年ですね。未来100年というのを見てみましょう。

そうすると2050年、もう40年ちょっとで何が起るのかということ、人工物の飽和ということが起きてきます。これはあまりお聞きになった言葉ではないと思います。この後、人工物の飽和について説明します。



地球温暖化の深刻化、これは皆さんよくご存知ですね。それから、資源の欠乏、これもよくご存知ですね。この最初の人工物の飽和ということは、将来を見ていくときにもすごく大切なことです。これはどういうことかということ、日本の自動車の例を考えればいいのです。日本だけでなく、OECD先進国は皆そうですが、今年初めて、日本の自動車の保有台数が減りました。日本では、今、人口が1億3千万人いて、2人に1台くらいの自動車を持っているので、5800万台の自動車があります。人口が増えていないのですから、それ以上は増えないですね。事実、ここ20年くらい、保有台数はほとんど一定です。この時、どれだけ新車は売れますか。廃車になる数だけじゃないですか。ご老人が乗らなくなって、若い人が新しく買うということもありますが、結局、廃車になる分だけの新車が売れる訳です。だから、日本の自動車の国内の販売台数というのは年間500万台で、ここ20年ほとんど変わっていません。景気によって450万台になったり、時には600万台売れたりすることもある訳ですけど、つまり、国内の自動車の販売台数は年間500万台なんですよ。それは500万台廃車されるということです。この状況を、私は人工物の飽和と呼んでいます。これは当たり前のことですが、ものすごく大切なことです。

先ほど環境大臣が、携帯電話にはいろいろな資源が入っているとおっしゃった。携帯電話もそうです

が、自動車で考えてみてください。廃自動車の中に、新車を作る資源が全部入っている。自動車の主体は鉄です。鉄というのは、もう一回溶かして使うことができます。ただ残念ながら、今はまだ技術などが追いついていなくて、廃自動車から新車を作っているわけではないですが、建材などを作っているということで、いずれにしても鉄として再利用されている。それから、自動車には、触媒としてパラジウムや白金などいろいろな貴金属が使われている。たくさんさんの半導体にも、新しいものを作るのに十分な、いろいろな資源が入っている。これは、日本の自動車だけでなく、先進国の自動車は皆そうです。それから、2050年までにはインドも中国も自動車をたくさん持ちます。その時に、世界には新しい事を作る資源が全部あるということです。今は、資源が高騰して大変だと言っている。鉄鉱石やインジウムの値段が上がっているとか、貴金属が足りないと言っている。先ほど環境大臣が、都市鉱山という言い方をされました。少し統計が難しくて精度の問題もありますが、パラジウムやインジウムなどの希少な資源が、日本には既に世界の生産量の5倍ほどあると言われています。これが都市鉱山というもので、しっかりと回せば、資源なんてあるという話です。

その代表的な例が鉄であり、量的にも最も重要な資源ですね。鉄をどのようにして作るかというと、鉄鉱石を買ってきて、コークスを使い、溶鉱炉で作ると思われすよね。それは正しいのですが、今、世界で年間14億トンの鉄を作っていて、その内の10億トンが今言った鉄鉱石から作る鉄です。そして、4億トンがスクラップを溶かして作っています。自動車の鉄をもう一回鉄にしたり、船の鉄をもう一回鉄にしたりしているということです。ではなぜ今4億トンなのかというと、30年から40年前に作った鉄がこれだけあって、その鉄が今スクラップとして出てきているから、それを使っているということです。あと40年経ったら、14億トンのスクラップが出てくるということです。これは、人類にとって良いニュースです。なぜなら人類は、永久に鉄鉱石を掘って鉄を作る必要はないということです。大雑把に言うと、一度鉄鉱石を溶鉱炉で還元して、鉄にしたのならば、この鉄は永久に社会の中で使われるということです。例外は、タイタニック号や戦艦大和といったもので、これらは人類の社会から海

の中に消えてしまったわけです。それ以外の鉄は基本的にまた使われます。

人類の数が今60数億人ですが、恐らく90数億人か100億人くらいで飽和する。そうすると、それに対して、自動車の数だとか、ビルの数だとか、あらゆる人工物の数が飽和するということです。あとは上手く回せば、人間は地下資源を掘る必要はなくなる。あと必要なのはエネルギーだけ。というのが、人工物の飽和ということと、自動車や携帯電話という物で見た話と、鉄という元素で見た話になるわけです。

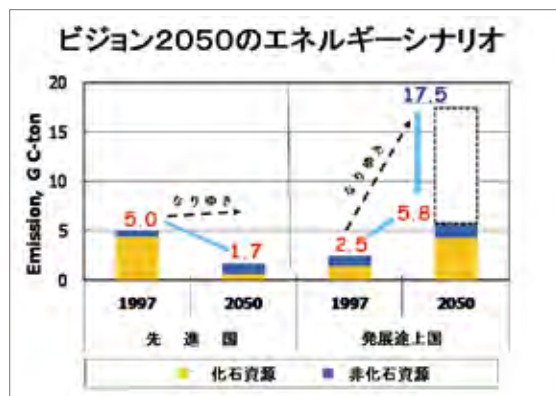
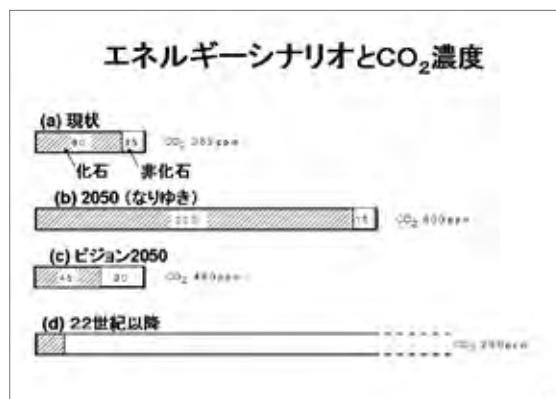
もう1つ良いニュース。今なぜ鉄のスクラップが使われているのかというと、安いからです。鉄鉱石を買ってきて、コークスを使って溶鉱炉から作るよりも、スクラップを溶かす方が安いのです。だから、別に計画経済をやっているわけではなく、自由マーケットで、スクラップがリサイクルされているのです。なぜ安いのかというと、これは、エネルギーを少ししか使わないからです。鉄鉱石というのは、鉄に酸素が付いている酸化物なわけです。これから酸素を外すのに、コークスを使っている。コークスは炭素なので、CO₂になって出て行きます。その代わり、酸化鉄の酸素が外れて鉄になるわけです。しかし、スクラップは、表面が錆びていたり、塗料が塗ってあったりするけど、基本的には鉄だから溶かせばいいんです。溶かすエネルギーと、還元するエネルギーを比べると、鉄の場合だったら還元するエネルギーの方が27倍大きい。圧倒的に大きいのです。アルミニウムの場合だったら、還元するエネルギーの方が78倍大きい。溶かすエネルギーの方が小さいのです。だから、アルミニウムだって鉄だって、スクラップが経済的に回るわけです。つまり、リサイクルが省エネルギーになるということです。これが、人類はリサイクル社会に向かわなければならない、という根拠です。

2050年、今から42年後ですね。私が生きてれば106歳。何とか生きていたいと思っているのですが、その時には鉱物資源というものがなくなります。鉄やアルミニウムだけでなく、その他の金やパラジウム、白金などの高価なものは既に回収されています。それから畑に撒く窒素・リン酸・カリウムのうちのリンというのは、とても資源が欠乏してきている。しかし、日本全体では、汚泥などにたくさ

りんが入っているので過剰にあるのです。そういうものをきちんと回すという社会に向かえば、日本は資源のない国というハンディキャップを逆手にとって、それが世界のモデル、“de facto standard (事実上の標準)”になるのです。それこそ、フランスがフランス革命を行って民主主義というような社会システムをつくったり、イギリスが権利の章典で議会主義というものをスタートさせたり、アメリカが自動車社会や情報社会で世界を引っ張ったり、というようなものを日本が引っ張る時代に入ったのです。なぜなら、アメリカには、このようなリサイクルしようとするインセンティブが無いのですから。日本と違って捨てる場所なんていくらでもある。近くに砂漠はあるし、岩塩のフィールドもあるから、そこに埋めとけばいいわけです。また、エネルギーも安い時代の名残で浪費している。圧倒的に、21世紀の向かうべき方向に近い条件にあるのは、日本なんです。ですから、こういうことを徹底的にやる、というのが私のモデルです。

今、鉄鉱石の値が上がっていますが、20年、30年、できれば40年ぐらい先を見れば、資源は要らなくなる。1970年にローマクラブというところが、「成長の限界」という本を書いて、地球は有限なんだ、という警告をしました。今のままだと生産というのはこうなるよ、という警告で、鉄鉱石からつくる鉄の量が減るという話。この警告はとても良い警告だけれども、先ほど私が言ったことが、これに対する答えです。今、10億トンの鉄鉱石と4億トンのスクラップから鉄をつくっていますが、これからずっとスクラップが増えてきます。そうすると、スクラップをきちんと回す社会システムをつくっていくというのが、循環型社会の基本的なことです。リサイクルしてはいけないという本や、リサイクルはいろいろところで無駄にしているという話は、局部的には当たっているところが無くはない。しかし、トータルとして、リサイクルしてはいけないという考え方が間違いなのです。明確に間違いです。今、行っているリサイクルの中には問題がある、と何人かが言っているだけです。その問題というのはもちろん解決すべき課題です。しかし、大きな方向としては、自信を持って、循環型社会に向かって進むべきです。

私は、1995年ごろに“ビジョン2050”というものを発表しています。2050年ということ、物とエネルギーという観点から考えてみると、基本的な問題がいくつかあります。今日もバイオマスのいろいろな利用方法について表彰されておられました。それはエネルギーの話で、とても大事です。循環型社会さえつくれば、エネルギーなんていくら使ったっていいというわけではないのです。化石資源はなくなるのだから、エネルギーの問題も解決しないといけない。石炭があるからどんどん使えばいいという話もだめです。温暖化が問題だからです。温暖化、ゴミ、エネルギー資源が無くなる、この3つの問題を同時に解決するものでないと答えにならないのです。



私の答えは、エネルギー効率を3倍にするというものです。自動車に乗るのを止めようというのもいいけれど、私はどちらかというと車好きだから、やはり乗りたいわけです。乗るけれども、エネルギー消費、つまり燃費が3分の1になり、3分の1のガソリンで車が走ればいいわけです。それからバイオマスもそうですが、再生可能エネルギーの使用量を今の2倍にしていく、というのが私のモデルです。これは理論的に適切で、技術的にも可能です。そし

て、国際合意がぎりぎり可能な線であると思います。中国やインドは、今までCO₂を出してきたのは先進国じゃないかと言う。今も、そちらの方がたくさん出しているから、そちらが8割削減と。アメリカは、どんどん伸びてきているのは途上国じゃないか。途上国が枠組みに入らなければ俺は嫌だよ、と言う。その両者が合意出来るぎりぎりの線がこのモデルで、必ずこれに近づいてくるし、今の流れは既にこういう方向に行き出していると、私は思っています。

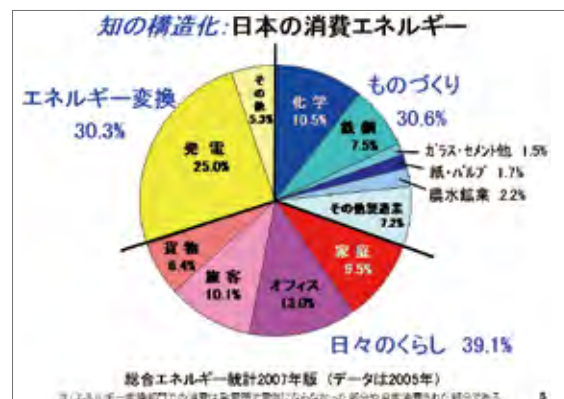
ということなのかというと、現在、世界では化石資源を炭素換算 60 億トンぐらい使っている。バイオマスと原子力、水力といった非化石資源は 15 億トンぐらい。このまま放っておくと、化石燃料の使用は、途上国が伸びてきますから、2050 年には 3 倍くらいになる。こうなると、CO₂ の濃度というのは、産業革命以前の 2 倍を軽く超えます。これではもう成り立たない、石炭資源も恐らく持たないという状況で、これは破滅型のシナリオです。残念ながら、今、世界はここに向かっていきます。

私のビジョンというのは、サービスを落とすことはやめよう、というもの。この快適な生活から、非快適な生活に戻ると言うのは、やはり現実的ではないし、文明を逆行させるようなことは出来ないだろうと思います。だから、サービスは増えるし、車の数も増える。しかし、エネルギー効率が 3 倍になるから、今と同じエネルギーの消費量で済む。そして、非化石のエネルギーを倍にすれば、CO₂ も減る。ただし、CO₂ 濃度は今よりは高くなります。今は 380ppm ぐらいで、将来 460ppm ぐらいになるが、それでも 460ppm ぐらいで止まる。もう温暖化というのは防げません。防げないけれど、ぎりぎりのところで抑えよう、ということです。

では、なぜこれが途上国と先進国が合意できるシナリオだと私が思っているのか。まず先進国の日本はもう車の数は増えていない。このあと、どんどん燃費の良い車が増えていきます。私もハイブリッドの車に替えたら、東京都心で、それまでリッター 7 km だったのが、今はリッター 23km も走っています。ガソリンの消費量が、3 分の 1 以下に減っているわけです。後はエネルギー効率が良くなるから、2050 年までにエネルギー消費が 3 分の 1 に減る。そして、自然エネルギーを倍にすれば、化石燃料の

使用量は 8 割減るというモデルです。2050 年までに 60% から 80% 減らす合意をしようと、洞爺湖サミット等で日本が言っています。ヨーロッパが言っているのも基本的にこういうことです。一方、途上国はどういうことになるのかというと、良い生活をしたいわけだから増えるのは仕方がない。だけど、これだけでは困ります。今はエネルギー効率を上げずに使用量がでたらめに増えているわけです。しかし、エネルギー効率を 3 倍にしてくださいと。そうすれば、途上国の使用量は伸びるけれども、CO₂ の発生量は抑えられるという、基本的にこのようなモデルです。私は、このあたりが途上国と先進国が妥協する線だと思っています。

さて、日本がこれからどうするのか。これには、日本がエネルギーをどこで使っているか、ということを知らないといけません。日本のエネルギー消費を示したグラフがあります。“ものづくり”として、鉄鋼や化学、セメントなどで多く使っています。その一方で、家庭やオフィス、自動車で使うエネルギーの方が多いのです。日本の政策が間違っているということを申し上げますが、何が間違っているかというと、鉄鋼生産で減らすというように、“ものづくり”で減らすという話ばかりしていて、“日々の暮らし”の方で減らすことをきちんと議論していないことです。



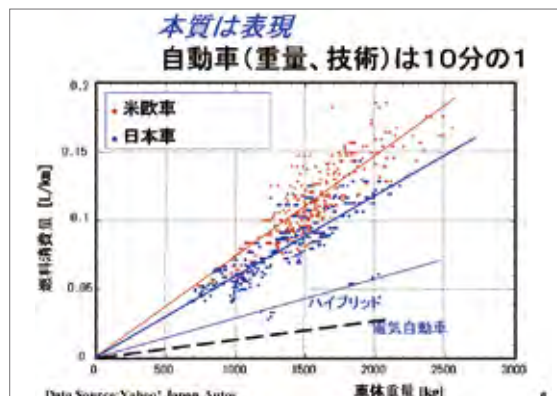
大事なことの 1 つは、先ほどの「人工物の飽和」ということで、長期を考えるととても大切な概念です。もう 1 つは、省エネルギー。省エネルギーは、大きく分けると 2 つあって、“無駄な電気を消しましょう”ということと“エネルギー効率を上げましょう”ということ。どちらの効果が大きいのかといえば、“エネルギー効率を上げましょう”の方が

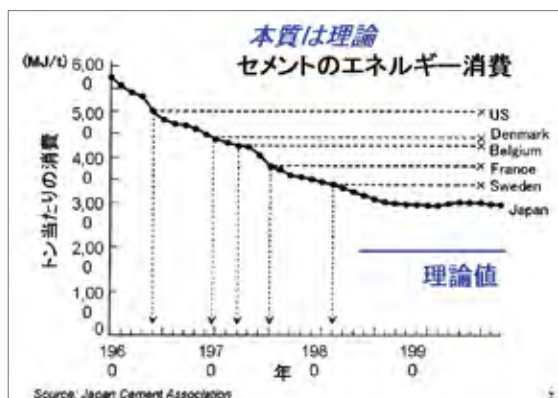
何倍も大きいです。先ほどの自動車の例でも、ガソリンの消費量が3分の1になったと申し上げました。照明のエネルギーについては、蛍光灯から今、山形で活発な有機ELに替わるだけでも半分ぐらいになるし、白熱球から替わったら10分の1ぐらいに減ることになるわけです。“無駄な電気消しましょう”というのはとても大切であり、もったいない精神で行うべきだと思いますけど、これで出来るのはせいぜい2,3割だと思います。本当に3分の1にしようと思えば、やはり新しい技術を開発して、良くしていくということが大事。例を挙げれば冷暖房です。冷暖房というのはお風呂と並んで、家庭のエネルギー消費の最大のものの1つです。このエネルギーは、ものすごく減ります。まず1つは家の断熱です。暖房というのは、寒いところを暖めているのではなく、外に逃げていく熱を一生懸命補っているのです。だから極論すると、家が魔法瓶であれば、一度暖まったら石油ストーブを切ればいいんです。これが家の断熱を良くしようということ。私のエコハウスの話も少しさせていただきますが、私は7年前に家を建て替えて、エネルギー消費が8割減りました。8割が減って、2割になったのです。家の断熱については、それほど特殊なことをやったわけではない。1枚のガラスのものを、2重ガラスにしたということが多分一番大きくて、あとは断熱材。それだけでも多分3倍違います。もう1つは、クーラーやヒーターの効率です。エアコンの効率はどんどん上がってきています。もしも家の断熱が3倍良くなって、エアコンの効率が3倍になれば、冷暖房のエネルギー消費というのは9分の1になります。これがエネルギー効率ということです。

これはノーベル賞を取ったアメリカのアル・ゴアの話です。我々が100万言費やしてもなかなか影響力を及ぼせなかったものを、映画1つであれだけの影響力を与えたのだから、立派であるし尊敬します。だけど、やっていることは私の方が5倍良い。それは給湯です。これも暖房と同じくらい家庭で使っている、非常に大きなエネルギーです。これは要するに、お湯をつくって、シャワーを浴びたりお風呂に入れたりすればいいわけです。お湯をつくるのに、日本では普通、瞬間湯沸かし器を使います。この瞬間湯沸かし器が、今、アメリカやオーストラリアでバカ売れしているそうです。アメリカもエネ

ルギー価格が高くなってきたからでしょう。では、アメリカではこれまでどうしていたかということ、ガスでお湯を沸かして貯めておいて使うそうです。そうすると断熱も悪くて冷めてしまうから、最終的な効率が40%ぐらいだそうです。瞬間湯沸かし器に替えると、効率80%でガスの使用量が半分に減るわけです。しかし、私の家はもっと良いです。私の家では、ヒートポンプというのを使っています。エコキュートという名前で売り出されていて、これは電気を使って環境の熱を汲み上げます。そしてこれは、1の電気を使うと、4のお湯がつくれるものなのです。ところが、電気をつくるのに無駄がありますね。つまり、ガスを燃やしても100%は電気にならない。今一番良いとされる川崎にある発電所では、52%電気になりますが、ガスであれば日本の平均値で50%ぐらい電気になります。そうすると、ガスを電気にすると50%になり、その4倍のお湯をつくるから200%。結局、同じお湯をつくるのに、エネルギー効率が、ヒートポンプだと貯湯式より5倍良くて、ゴアがエコキュートを買ってくれたりすれば、あの人のガスの使用量は5分の1になるんです。8割減ることになります。これが要するに、エネルギー効率ということです。だから、こういうことをやっていくことがとても大事です。

自動車のエネルギー消費についてのグラフですが、横軸に車の重さ、縦軸に1キロ走るのにどれだけエネルギー使うかというガソリン消費をとります。そうすると、明確に2つに分かれます。同じ重さでも、日本の車は20%ガソリン消費が少ない。これが技術の差で、日本の車の方の技術が高い。ハイブリッド車になれば、同じ重さでガソリン消費量がさらに半分だし、これが電気自動車になれば、さらに半分になります。そのうち、10年もかからず、





ハイブリッド車が電気自動車になりますので、その重さが半分ぐらいになれば、本当にガソリンの消費なんて10分の1になります。大きな可能性ではなくて、非常に確実性があるのです。これも人類にとっての良いニュースであり、期待できることです。

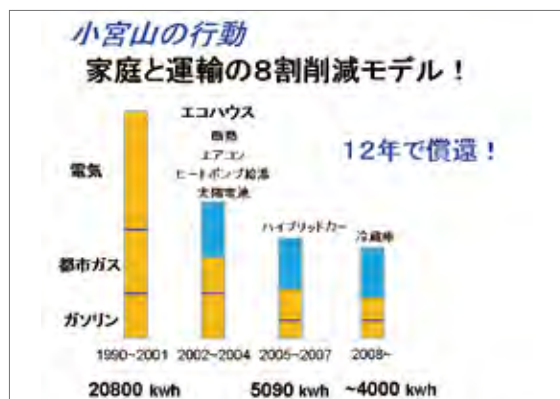
一方で、何でも減るかという、そんなことはありません。それがセメントです。1960年から1990年頃にかけて、同じ1トンのセメントをつくるのに、どれだけエネルギーを減らしてきたかという、日本では既に40%ぐらいまで減らしてきました。他の国、アメリカあたりだと、まだ日本の1.8倍ぐらいのエネルギーを使っています。これが日本のエネルギー効率が高いと言われている例です。しかし、これがこの後減っていません。それは理論値に接近してきているためです。セメントというのは、石灰石を掘ってきて、熱をかけてCO₂を追い出すわけですが、吸熱反応という熱が必要なのです。だから、その熱だけは、どうしても必要です。もう少しくらいは減らせないこともないかもしれないけれども、技術屋として考えたらもう減らせないというところまで来ています。しかし、それでは世界のセメントのエネルギー消費は減らないかという、そんなことはない。今、世界のセメントの50%を中国が生産しています。きちんとしたデータが無いけれども、いろいろな人から話を聞く限り、エネルギー効率は大体アメリカと同じくらいか、悪いかも知れないという話です。日本の最先端のテクノロジーでセメントをつくれれば、半分のエネルギーで出来ます。つまり、世界の半分のセメントをつくっている、そのエネルギーが半分に減るのです。途上国でエネルギー消費が伸びるのは仕方ないとしても、高いエネルギー効率でやってくださいと言ったり。これは、途上国に当然要求すべきだし、途上国の責任だと思う

うわけです。

日本では、セメント生産でのエネルギー消費はもう減りません。今まで捨てていたバイオマス燃料にして、それでセメント産業に供給しているという表彰が、いくつか今日ございました。これはとてもいいことです。石油の代わりにバイオマスを使うから、これは、再生エネルギーを増やしようという話です。けれども、セメント生産自体のエネルギー消費というのは減らないのです。これはセメント生産に限らず、効率の良い日本のものづくりでエネルギーは減らないということです。だから減らすのは“日々の暮らし”の部分です。なぜなら家庭の中では、お湯も減るし、冷暖房も減るし、照明だって減ります。それから自動車も大きく減る。日本はここを減らすことで、新たな産業をつくることできれば、それが世界の産業の“de facto standard”となり、日本の国際競争力につながるのです。

日々の暮らしで削減する。それには、市民の役割が重要です。そこで、私の行動ですが、7年前に家を建て替えるチャンスがありました。どこの家でも50年ぐらいで建て替えますよね。だから、2050年というのをターゲットにすれば、大体、今ある家というのは建て替わることになります。家を建て替える、電気製品を買い替える、そういう時に効率の良いものを使う。そういうことに、少しインセンティブをつけるなり、規制をかけるなりしていくことが、我々がとるべき政策だと思います。そこで、一番大きいのが断熱、そしてエアコンです。家を建て替えるときは、大概古いエアコンを買い替えますね。それに私はヒートポンプの給湯器を付けた。このような省エネで、以前のエネルギー消費と比べて大体半分になりました。残りの半分の60%を太陽電池で供給しているので、昔に比べて、エネルギー消費が20%になったわけです。そして今はオール電化で年間トータルの電気代が5万円しかかかりません。普通、電気代とガス代と石油代で、1年間に30万円ぐらいかかります。そのくらいかかって、5万円に減っています。これぐらいだと計算では12年で償還できます。というのは、2重ガラスにすると、大体価格が倍になります。そのほかにも太陽電池が236万円ですが、36万円の補助金がありました。それらで300万ほど余計にかか

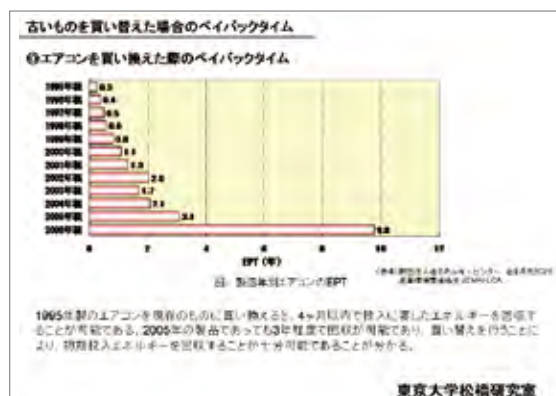
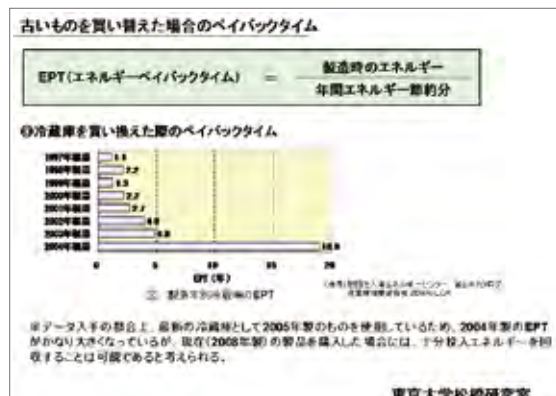
りましたが、電気代とガス代で年間 25 万円ぐらい減るということを併せて考えると、大体 12 年ぐらいで償還できます。



そのとき、もったいないという議論が、私の家の中でもあるわけです。この間、冷蔵庫を買い替えるときに、妻が、やはり「使える冷蔵庫を捨てるなんてもったいない。」と言うわけです。私は、「古い冷蔵庫というのは、たくさんの電気を使うのだから、その方がもったいない。」と言います。どちらがもったいないのでしょうか。日本では、家電リサイクル法というのが出来ていて、冷蔵庫はリサイクルされている。冷蔵庫はほとんどが鉄で、リサイクルにより、もう1回鉄になって使われています。リサイクルのやり方が完全かと言われれば、それは問題もありますが、基本的には回っています。だから、資源の無駄はありません。そうすると、新しい冷蔵庫を作るのにかかるエネルギーと、古い冷蔵庫が消費するエネルギーの大きさがポイントです。何年たったら、エネルギーを取り返せるかということを考えると、答えはエネルギーの方がもったいないのです。

東京大学の松橋研究室という研究室でとったデータがあります。1980 年頃から最近まで、冷蔵庫のエネルギー効率が良くなってきている。1980 年のときの冷蔵庫と比べると、エネルギーの消費が大体 5 分の 1 ぐらいになっているという状況です。だから新しいものに買い替えるとエネルギー消費は減るわけです。では何年で、新しい冷蔵庫を作るのに使ったエネルギーを回収できるのか。10 年前の冷蔵庫から替える場合でも、新しい冷蔵庫を作るのに使ったエネルギーを 1 年ほどで取り返すことができます。私が買い替えたのは 15 年前の冷蔵庫なので、私が計算すると、半年ぐらいでエネルギー

を取り返すことができます。エアコンだと、1995 年製と 2007 年製を比べれば、0.3 年。4 ヶ月ぐらいで、新しいエアコンを作るのに必要なエネルギーを取り返すことが出来ます。問題はコストです。コストだともう少しかかって、1991 年製の冷蔵庫を 2005 年製に買い替えたときは、大体電気代の差額で約 6 年。エアコンだと 7 年というように、6, 7 年でコスト的にもペイバックできる。だからやはり、20 年使っている冷蔵庫であれば、無条件に替えた方が得なのです。



私たちは、もう大学でもやるということに決めています。2012 年というのは、京都プロトコルの約束期間です。やはり、鉄やセメントなどの“ものづくり”ではなく、“日々の暮らし”の方を社会運動としてやっていくということが必要で、その社会運動の先頭に大学も立とう、というのが我々の決断です。東京大学サステイナブルキャンパスプロジェクトというのをつくって、2012 年までに 15%、2030 年までに 50% 減らします。そのためには、様々なことをやります。1 つは家電の大量買い替えで、最初に行ったのは蛍光灯の買い替えです。東大にも随分と古い蛍光灯があって、2 割ぐらいが古かった。その蛍光灯は新しいものと比べると、倍ぐらいのエ

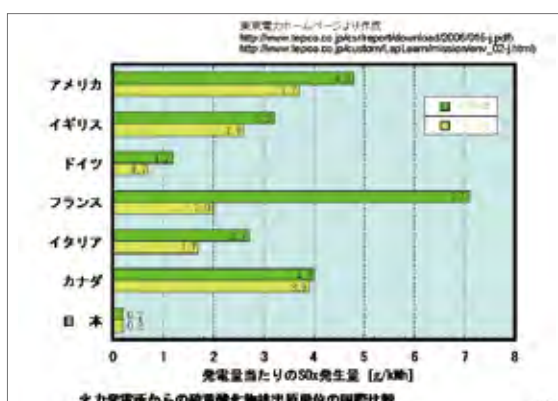
エネルギーを使います。結局、3万8千台の蛍光灯を入れ替えました。幸い非常に安く買えて、コスト的にも4.5年で元を取れそうです。この後は、古いエアコンなどがたくさんありますので、そういうものを、1000台、2000台という形で入れ替えていきたいと考えています。その他にも、つけっぱなしのパソコンの電気を自動的に落とす、というような実験を始めようと思っています。

21世紀に入って地球が小さくなった中で、どのような新しい社会をつくっていくのか。どのような生活を我々は望むのか。これを自分たちで決める時代に入ったのです。アメリカやヨーロッパを見ても仕方がない。日本だけが突っ走れ、なんてことは言わないが、日本が高齢化、それから有限の地球というものの影響を一番強く受けている。というのも、狭い国土で、資源は無く、人口密度が高く、人々の1人1人が極めて高度な生活を営んでいるからです。あと30年たったら、世界中がそうなりますね。中国、インドが先進国の仲間入りするのは、遅くとも2050年までかからないでしょう。中国とインドとブラジルが先進国の仲間入りをしたら、世界中が狭い国土で、資源が無く、人口が多くて、1人1人が高度な生活を営んでいるという状況に入ります。だから日本が、課題先進国だと、私は言うのです。どういうことかと言うと、今の日本の課題というのは、世界の課題だということです。世界が間もなく抱えるこれらの課題に答えを出すのに、他の国を見てもモデルなんて無い。ここが明治の時代や昭和の復興の時と違うところです。自分たちでモデルをつくるという覚悟です。人に相談することなく、自分で決めればいい。そのモデルが成功すれば、世界の“de facto standard”になっていく可能性が極めて高い。

インターネットを通じて高校生に講義する機会がありますが、本当に高校生の持つイメージは暗いです。若い人たちに暗いイメージを与えていて、国が強くなるはずがない。だから私は、高校生には良いことを言っています。昭和42年、私が大学を卒業したときですが、隅田川は本当に汚いし、臭くて、川開きもやめてしまった。それが、今では回復し、10年以上前に白魚が隅田川に戻った。こんなことが出来た国は世界にありません。それから、名古屋

市の藤前干潟の話ですが、ここではゴミ処理場が足りなくなって、藤前干潟という渡り鳥の営巣地を埋め立て場に使おうとしたわけです。やはり市民が反対したのですが、それではどうしたのか。反対したって、ゴミ埋め立て場は必要です。結局、ゴミを減らしかつ分別するという選択をしました。そうすると、その当時、ゴミは増えていくという予測でしたが、7割まで減ってきました。それから同時に、分別もきちんと言った。ゴミを燃やした後に残るのはビンやカン、つまり、セラミックスかメタルです。それをきちんと分別さえすれば、燃やしたら無くなるのです。結局、名古屋市では、焼却の残りが10分の1に減りました。だから、埋め立て場は必要なくなったし、最新鋭のゴミの燃焼装置2基のうち1基は今でも遊んでいるそうです。藤前干潟が残ったという、このような話をどんどん伝えていかないといけない。つい最近の、とても大切なことですし、こういうことが、日本中にあるわけです。水俣湾だって、水銀の問題でひどい目にあったわけですけど、今行ってみてください。もう本当に復活してきれいになりました。失敗はしたけれども立ち直ったということをやはり伝えていかないと。こんな国、世界にないですよ。

1960年、私が小学校の頃の社会科の教科書には、煙がもくもくと出ていて、空が汚れているのは日本の発展の証だと本当に書いてありました。仕方がないですよ、そういうつもりでやってきたわけだから。汚してしまったけど復活させた。今、世界の密集した都市で、日本の都市が一番海も川も空もきれいでしょ。なぜ環境先進国がドイツなのか、なぜそういうことを言いたがるのか。スウェーデンハウスなんて言ってないで、それぞれでエコハウスを作ればいいわけですよ。そうすると、快適で省エネな、アジアのモンスーン地帯に相応しい家のモデルが出来ます。家の産業というのは莫大です。今の経済クライシスだって、基本的にはサブプライムですから。サブプライムは家のローンです。家というのはそれだけ巨大な産業だから、北海道で良い、山形で良い、東京で良い、宮崎で良い、そういうダニだのカビだの付かない、快適な省エネの家というモデルを作ればいい。それが基本的な国際競争力になります。



火力発電所の発電量1kWhから、どれだけの硫黄分が排出されているかというデータがあります。もう一目瞭然です。一番少ないのが日本です。石油にも石炭にも硫黄が入っているから、燃やせば硫酸ガスが出来ます。それをそのまま出せば、硫酸が出来て酸性の雨が降るわけです。だから取り除かないといけない。それで、煙を洗う排煙脱硫ということをする。1990年代の前半に私が調べた時、世界で4千台の脱硫のプラントが動いていました。そのうち、何と3千2百台が日本で動いていたのです。世界の5%しかエネルギーを使っていない国で、世界の8割の脱硫プラントが動いていたわけです。まともに脱硫を行っているのは日本だけだったということです。皆さんもご存知ではなかったかと思います。なぜ、これでドイツが環境先進国なのか。確かに、最近ドイツが良いと言われるのは太陽電池です。去年、日本はドイツに導入量で抜かれました。しかし、日本ではこれまで太陽電池についての研究開発を行い、余ったときは発電所に売って、足りないときは買うというシステムをつくった。家庭での導入には1軒で600万円もかかるから、最初のうちは300万円も補助金を出して育ててきた。補助金を打ち切るのが少し早かったとかいろいろな話はあるけれども。しかし、それでも抜かれたといっても2位です。ずっと1位だったのが2位になっただけで、なぜ、そんなに非難するのか。もう一度抜き返せばいいじゃないですか。なぜそんなに、日本が悪くて、環境先進国ドイツに学べという話になるのか。大人がきちんと事実を見て、自分たちで判断して前に進むという姿勢を見せなければ、若い人が育つわけはないです。

20世紀から21世紀に入って、明らかにパラダイムは変わりました。それは、地球が小さくなった

ことと、社会が高齢化してくることの2つ。これに対して、新しい社会、生活、都市というもののモデルが必要です。それを他の人がつくってくれるわけではない。自分たちでつくっていくということだと思います。私は、いろいろなことのスタートではないかと思っています。教育の問題があるけれども、教育というのは、基本的には、子どもは親がやっていることを見て育つ。お母さんが夜なべしてやってくれていることを見たら、子供が親孝行しようと思うのは当たり前です。先生だって一生懸命やっている。それを真似るわけです。基本的には、大人が自分たちで新しい社会をつくっていくこと。その中で、3Rというのは、絶対に自信を持って良いことなのです。これは、いずれ世界が真似します。自信を持って前に進んで行きたいし、私もその一翼を担いたいと思っています。

どうも、ご静聴ありがとうございました。



●記念講演 「俳句でエール！ ～小さな言葉が大きな力～」

黛まどか(俳人)

みなさんこんにちは。黛でございます。私は俳句を通しての、自然、あるいは環境についてのお話をさせていただきたいと思いますが、私は神奈川県と静岡県の県境の湯河原町の実家からこちらに参りました。まだまだ湯河原のほうは紅葉してないんですけど、電車を乗り継いで、山形新幹線に乗って、こちらに近づいてくるにつれて、だんだん山が深くなってきて、薄もみじから始まって、もうずっとどんどん色づいてくるんですね、紅葉が。照りもみじという言葉がありますけれども、もみじではあっと明るくなって、真っ赤なところとか真っ黄色のところがあって、そして、今日は途中、だいぶ雨が降っていたんですけども、途中から急にパッと晴れたり、ちょっと日が差したり、また霧が出てきたりと、非常にいろんなお天気があったんです。そんな中で、俳句のもみじにまつわる季語が次々と頭に浮かびました。俳句では、やや色づき始めたもみじを、薄もみじという言い方をします。全山、真っ赤、真っ黄色になった山もきれいですけれども、本当に、ややに色づき始めた、もみじ。そういうもみじにも、日本の先人たちは、美しさを見出したんですね。それで、薄もみじですとか、初もみじという言葉が生まれました。それから、もみじに雨が降っている様子を、もみじ雨、もみじ時雨。もみじが盛りになって、ふぁーっと明るくなっている様子を、もみじあかりといいます。電気、明かりがついてるわけじゃないんです。もみじのまばゆさで、周りが赤く染まっている、それをもみじあかりといいます。そして、照りもみじ、山もみじ、谷もみじ。今日恐らくこの講演が終わって帰る時には、夕もみじを楽しみながら帰ることになるんだと思いますけれども、日本語ってというのは、本当にこういう風に、自然の移ろう様に様々な言葉を冠して、自然を愛でて来たことが



この日本語から良く分かります。

最初にちょっと俳句についての

お話をさせていただきますけれども、俳

句というのは、みなさんご存知のように、世界で一番短い文学です。たった17音の文学ですね。ですから、省略の限りを尽くして、17音まで言葉を削って削っていくわけです。その一滴が、俳句になるわけですが、そういう意味では、3Rの精神と通ずるのかも知れません。故に、沈黙の文学といわれます。文学なのに、黙るんですね。俳句を表現するときには、いかに黙るか、ということ意識して俳句を作ります。そして、黙った後の、17音の言外の余白に、その思いを漂わせる、その感動を漂わせる。それが俳句の独特の形式です。今の俳句の現状ですけれども、国内では、今、俳句人口800万人とも1,000万人ともいわれています。そのくらい、俳句はブームになっています。今から十数年前、橋本内閣の組閣の日でしたけれども、ニューヨークタイムズの支局長が、私のところに取材にいらっしゃいました。俳句の話を知りたいという風にいらっしゃったんですけれども、今日は組閣の日なのにそちらの取材はいいんですか、という風に言ったら、その支局長さんが、いや、私は、日本の政治や経済もさることながら、日本の文化に大変興味があると。その方は、東京支局に着任したばかりだったんです。日本っていうと、どうしても経済っていうイメージがあって、エコノミックアニマルとかそういうイメージが先行していたんですけども、実際日本に着任してみて、改めて知ったことが、日本は詩の国であった、とおっしゃいました。とにかく、ほとんどあらゆる新聞、週刊誌、そういったものに、俳句、川柳、短歌の投稿コーナーっていうのがありますよね。そして、お茶の缶とかキャンディの袋とか、そういうものにも、俳句が出ている。今世界中で詩の世界は低迷していて、ヨーロッパでもシェークスピアのソネットの初版が二千部くらいしか刷られない時代といわれていますが、そんな時代に、日本はあらゆる新聞週刊誌に、短詩系のコーナーがあると。そしてそこに毎週、ものすごい数の詩が普通の、一般の人たちから寄せられる。こんな国は世界中探しても他にどこにもないだろう、ということをお



しゃいました。それに大変驚いた、ということをおっしゃいました。私もそういわれてみて改めて、そういえば新聞雑誌にはみんなそういうコーナーがあるなあ、という事に気が付いたんです。そのくらい、当たり前のことのように私たち日本人は、短詩系文学に親しんできた、ということが言えると思います。

そして、国外での俳句ですが、ここ数年、数十年、ヨーロッパをはじめ、アメリカ、今百カ国以上、俳句を楽しんでいる国があるという風に聞いていまして、非常に海外でも俳句が注目されています。私も今年パリで講演をしてきましたけれども、お客さんの9割以上がフランス人でした。フランスでは、近世の日本の俳句、蕪村とか、芭蕉とか、一茶とか、そういった人たちの俳句を集めたアンソロジーの翻訳本が、今7万部以上売れていると聞いています。日本でも俳句の本は7万部ってなかなか売れないんですね。そういう現実の中で、フランスで近世の俳句が7万部以上売れていると聞きました。大変皆さん、俳句に興味を持っていらっしゃる。それから、私自身も、パリの他に、パーレーンという中東の国で、去年と一昨年と2年続けて招かれて、俳句の話をしたり、俳句の朗読をしたりして参りました。ですから、アメリカ、ヨーロッパ、そういうところ以外でも今、非常に俳句に対する関心が高まっています。そして、過去においても、俳句は、長いこと注目されてきました。まずは、ソ連の、エージェンシュテインという映画監督がいらっしゃるんですけども、そのエージェンシュテインが構築した、モンタージュ理論というのがあります。そのモンタージュ理論っていうのは、今の映画にも大変影響を与えたといわれていますけれども、日本の俳句に発想を得て、構築された理論なんだそうです。そして、もう少し近いところでは、ジョン・レノン。ジョン・レノンが、イマジンという曲を作りましたけれども、あのイマジンという曲は、日本の俳句に出会って、作った曲なんだそうです。そうい



われてみると、イマジンの歌詞っていうのは、一行一行が割りと短くて、ぼそぼそ、ぼそぼそ、とあって、あんまりこう饒舌な詩ではないんですね。そして、それが非常に俳句に似ている。そして全体

のタイトル。イマジンの、想像してごらん、というタイトルそのもの。俳句っていうのは、沈黙の文学で、俳句そのものは多くを語ってくれませんので、読者が想像して余白を紡いでいくしかない。それも、そういう精神も、俳句に通ずるものだと思います。そんな風に、俳句は日本固有の文学なんですけれども、少なからず、他の国、他のジャンルに影響を与えてきました。そんな歴史がございます。

そして、俳句のルールについて、簡単に説明したいと思います。俳句のルールはたったひとつ、有季・定形というルールがあります。有季は季語がある。そして、定形というのは、五・七・五。季語を入れて、定形、五・七・五である、ということです。そのほかにも、ちょっと切れが入るとか、細かいルールがあるんですけども、とりあえず大きくいうと、有季・定形、ということです。これは、季語を入れなくちゃいけないっていうんじゃないくて、俳句っていうのは、俳句そのものが季節への挨拶なんですね。季節に挨拶をしていく。それが俳句です。移ろう自然、そして、たまたまその時代に、同じ時代に生まれて、同じ場所ですれ違った他者、他の命へ挨拶をしていく。ですから、桜を詠むことは桜への挨拶、今日のもみじ雨を詠むことは、もみじへの挨拶、という風に、俳句は言います。まあ、挨拶っていうのは、こんにちは、さようなら、ありがとう、ということですけども、縁あって出会った、例えば、ひととの菫（すみれ）を詠むとします。その菫は、間もなく枯れていきますけど、俳句という器に詠むことで、その菫は、永遠に俳句の中で、命を宿すことができるんですね。ですから、300年前に松尾芭蕉が詠んだ菫は、今でもみずみずしく、芭蕉の俳句という器の中で、その命を輝かせている。それが、他の命への挨拶、ということだと思います。

どうして、こうやって季節にこだわるのか、四季を詠む歌が発生したのか、ということですけども、日本人には、独特の自然観があるように思います。これは、よく言われることでもあるんですけども、自然と対峙しない、自然と一体化していくという自然観があります。例えば、万葉集の歌ですが、

「春の野にすみれつみにと来しわれそ 野を懐かしみ一夜寝にける」

という歌があります。これは山部赤人という人の歌です。山部赤人は、官僚でした。官僚として、宮廷に使っていた赤人が、この頃は、菫は食用に使っていましたので、すみれつみに春の野に来るわけですね。そうすると、その春の野のあまりの懐かしさのあまりに、そこで野宿をしてしまった。一夜寝てし

まった、という歌なんですけれども、赤人とすみれが、あるいは赤人と春の野が、一体となったような歌です。おそらく赤人は、すみれに添い寝をするように、すみれの傍らで眠ったんだと思うんですけれども、そんな、おおらかな歌です。非常に万葉歌らしい、おおらかな歌なんですけれども、この歌を詠んでみると、なにかこう、私たち一人一人も、宇宙全体から見ると、ひとものすみれと同じではないかという思いがします。ですから、赤人が春の野に感受した懐かしさというのは、命の根源への懐かしさ、それだったのではないのでしょうか。他にも、俳句の季語を通して、日本人が自然と一体化してきたということを知ることができます。例えば、桜狩りという言葉があります。他にも、蛭狩りとか、今の季節ですと、紅葉狩りという言葉がありますけれども、決して、桜狩り、蛭狩り、紅葉狩り、といいましても、ハンティングするわけではないんですね。桜を手折るわけでもない。蛭を捕まえるわけでもない。もみじを手折って帰るわけでもない。そこに、桜が咲いているところ、もみじが美しいところに分け入って、入って行くんですね。決してこちらから、ああ、きれいだなあ、と眺めるのではなくて、その自然の中に分け入って、身を浸すようにして、その自然を愛でる。これが私は、日本人の独特の自然観ではないかなと思います。

そしてもうひとつ、移ろうものへの美学、というのが日本人にはあります。先ほど私は、薄もみじの話を書かせていただきましたけれども、薄もみじに限らず、様々な季語に、こういった移ろう様子を愛でてきた、というものが見られます。例えば、月です。私たちは、陰暦の8月15日に、中秋の名月を愛でますけれども、私は何年か前に、中国に俳句の講演に行ったことがありました。その時に、ちょうど、明日が中秋の名月、という日だったんですね。それで、空港に迎えに来てくださった、通訳の方と、話をしながら車に乗って、移動してましたら、その通訳の方が、明日は中秋の名月ですよ、という風におっしゃいました。本当に今思うと恥ずかしいんですけれども、うっかりその時に、中国にも中秋の名月ってあるんですかと聞いたんですね。そしたら、もちろんです、中秋の名月は中国で始まって日本に行ったものです、って言われました。中国ではどういう風にするんですかって聞きましたら、月餅を食べて、明日の夜はお祝いをします、っていう風におっしゃいました。ふと思ったのが、じゃあ明日が中秋の名月だったら、今日は待宵だなと思ったんですね。十四夜の月のことを、日本では待宵といい

ます。その通訳の方に、じゃあ今日は待宵の月ですね、中国でも



待宵の月と言うんですかって聞いたら、それは言いませんっておっしゃるんですね。じゃあ、十六夜はっていう風に聞いたら、十六夜もない、とにかく中秋の名月だけを愛でるのだという風におっしゃいました。ですから、もともとは中国がオリジンで、日本にやってきた中秋の名月なんですけれども、中国人っていうのは、オリジンの方は、十五夜の真ん丸の月しか愛でないんですね。次の日に、中秋の名月の宴を、向こうの詩人の方たちが開いてくださって、そこにお招きくださいました。私も伺ったんですけれども、その時に、ちょうど曇っていて、月が見えなくて、宴の会場に入るときに、向こうの詩人の方たちと、ああ、残念ですね、月が出てませんね、宴をしている最中に、月が出てくれるといいんですけどね、なんていう話をしながら、宴の会場に入りました。そうしましたら、宴をしている途中でふと思ったのが、日本では、月が見えないときには、無月という言い方をしますね。あるいは、中秋の名月で雨が降ると、雨月っていう言い方をしますけれども、ああ、日本人は、月が見えなくても、無月とか雨月とかいう言葉で、月を愛でるんだな。本来ならば、そこにあるはずの月。出ていない月さえも愛でてきた、という事がその言葉から分かると思います。向こうの詩人の方に、日本ではこういうときには、雨月とか無月っていう言葉を使うんですけれども、中国でもそういいますかって聞いたら、それはいいませんという風におっしゃいました。やはりそのあたりも、日本独特の美意識なんだな、っていう風に思いました。さらに日本では、十七夜、十八夜、十九夜と、立待月、居待月、寝待月、更待月と、本当に月の移ろう様、全てに名前を冠して愛でていく。それが日本人の美意識なのだな、という風に思います。さらに、その一ヵ月後の十三夜の月まで愛でてしまう。これが、日本人だと思います。そして、桜もそうですよね。初花から始まって、二分咲き三分咲きがあって、満開があって、花吹雪があって、そして、落ちた花びらを、花くず、花の塵などという言い方をします。さらにその、花びらが飛んでいって、池だとか、沼だとか、川の水面にかたまって浮いて流れている様子を、花筏という言い方をしま

す。ですから、初花から始まって、最後は飛んでいって、水に流れていくまで、もうグラデーションとして、言葉が存在するんですね。満開の桜だけを愛でる訳ではない。こういうのが、俳句の季語を通して、日本人の美意識というものが窺えると思います。

このように、季語というのは、単にその対象の意味を表すのではなくて、そういう、美しいものを美しいと思って目で情趣を覚え、という、日本の先人たちの美意識だとか、情感だとか、情趣だとか、あるいは涙だとか、哲学だとか悲壮だとか、そういった様々なものを抱え込んでいる、それが俳句における季語です。

このように自然とのかかわりの中での暮らしを詠むのが俳句です。少し、自然を歌った俳句というのを、例をあげて皆さんにご紹介したいと思います。

最初の句です。これは新年の句ですけれども、

「引く波に寄せくる波に初明り」

という句です。これは、鈴木真砂女さんという、5年前に96歳で亡くなった、女流の俳人の句ですけれども、引いてい



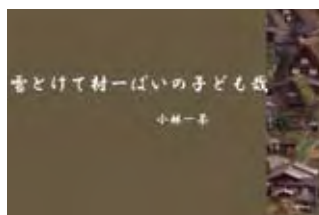
く波にも、寄せてくる波にも、なべて等しく元旦の日が射しています。初明りというのは、元旦の日のことをいいます。それは景として見た句ですけれども、この裏側には、私はやはり人生が例えられていると思います。人生にも波が引くときもあれば、寄せてくるときもあります。しかし、いずれの時も、やはり、新年になれば、日は射して、初明りに抱かれる、といった意味が込められています。鈴木真砂女さんは、日経新聞でも寂聴さんがずっと連載されていましたが、丹羽文雄さんですとか、様々な方の小説のモデルになった、非常に波乱万丈の生き方をされた方です。50歳過ぎてから家を出て、家出をして、全てを捨てて、京橋に小さな、卯波というお店を開くんですけれども、どんなときにも俳句と二人三脚で生きてきたという、俳人です。そんな真砂女さんだからこそ、引く波にも、寄せる波にも、明りを見出したのかも知れません。引く波があるから、寄せる波もまたある、ということ、この句が教えてくれているように思います。

このように、自然の営みが、私たちに生きるヒントを与えてくれる、教えてくれる、そういうことが、

俳句の上ではよくあります。次の句です。

「雪とけて村一ぱいの子ども哉」

これは有名な小林一茶の句です。春が来ました。まだ少し寒いんですけれども、もうそれまで雪に閉ざされて長いこと遊

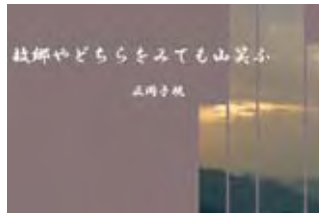


べなかった子どもたちには、もう関係ないんですね。早春の光の中で、声を上げながら村中の子どもたちが遊びまわっています。この句も穏やかな、とっても明るい句なんですけれども、実はこの句を作った一茶の人生というものは、この句と裏腹に、非常に厳しいものでした。一茶は幼い頃、お母さんと継母と、腹違いの弟さんとの確執の中で育ちます。そして、54歳にして、はじめて我が子を授かるわけです。昔の54歳というと、本当にもう翁の歳だったんですが、54歳にしてはじめて我が子を授かった。でもそのあとに、その初めて授かった我が子を、長男、長女、二男、三男、と相次いで亡くして、さらにその後、奥さんも亡くすんですね。そして最晩年、亡くなる直前に、火事で家を消失してしまって、仮住まいだった蔵の中で、一茶は亡くなっています。そんな不遇の境涯だったんですけども、そんな不遇の境涯を全く思わせえないような、穏やかで慈愛に満ちた一句です。

俳句は、先ほどの真砂女さんの句もそうですけれども、人の嘆きを受け止めて、そして多くを語れないですから、そう直接的な生の言葉っていうのは、言えないんですね。そういうものを全て濾過させた上で、こういう美しい景に昇華していくというのが、俳句の、私は美しいところだと思います。俳句の魅力だと思います。

「故郷やどちらをみても山笑ふ」

という句です。山笑ふは、春の山のことをいいます。木々が芽吹いて、山桜が咲いたり、山吹が咲いたり、色とりどりの

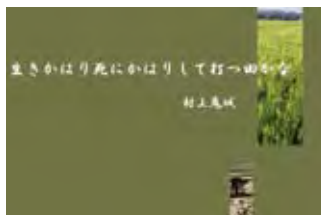


花が咲いた春の山っていうのは、本当にほわーっとして、山が笑っているように見えるものです。ちなみに夏の山は、山したたる。秋の山は、今のように紅葉で装っている山は、山装う。そして、木々が葉を落として眠りにつく冬の山を、山眠る、と季語では表現します。山に囲まれた故郷。そのどこを見て

も、春の山が目飛び込んでくる。山と共に、自然と共に春を迎えた、この四季の喜びっていうのが良く表れている句だと思うんです。人と自然が呼応している、一体化している。人も笑い、自然も、山も笑っている、という句ですね。日本人っていうのは、こうやって春の訪れを喜んで、そして、夏の豊かさ、秋の装いを称え、冬の山、これから眠りにつくという冬の山に、神の存在を見出して、神々しくひれ伏すように、冬の山に対峙している。そういう日本人の四季に寄せる思いというのを、こういう言葉がよく表していると思います。

「生きかはり死にかはりして打つ田かな」

村上鬼城の一句です。親から子へ、そしてその子へ、先祖代々受け継がれてきた、護り継がれてきた田んぼです。田植



えが始まる前に田を鋤きます。今は耕運機でやるんでしょうけれども、鬼城の頃は恐らく、牛や馬の力を借りてやっていたんでしょう。人は、生き死にによって変わっていきますけれども、その田は打ち続けられるという、生きるということの厳しさ、苦しさ、そして尊さを歌っている一句だと思います。そして、人が本来持つ、逞しさですとか、生きる力。そういうものも、この句は歌い上げているように思います。

「偽りのなき香を放ち山の百合」

という句です。この百合は、花屋さんで売られている百合ではなくて、自生する白百合です。この季節、山に入ると、本



当にどこからともなく、山百合の香りっていうのが漂ってきます。夏の山、初夏の山っていうのは、いろんな花が咲きますので、いろいろな香りが、草の香りも立ちますし、いろいろな香りが立ちます。でも、その様々な香りが立つ中で、山の中で、他にまぎれることなく、まっすぐに香りを放っている、それが山の百合なんだと思います。偽りのなき香というのは、そういうことを表現しているのではないのでしょうか。この句も、人の世に重ねると、一層深い句になると思います。いろいろな人がいて、いろいろな考え方があるけれども、他に紛れることなくまっすぐに生きている。そんな人の姿も彷彿させる一句です。

「夏草や兵どもが夢の跡」

これはもう本当に有名な松尾芭蕉の一句ですけれども、奥の細道の途上で、平泉で詠みました。皆さんよくご存知のよう



に、平泉では、藤原三代が栄華を極め、そして、義経ですとか弁慶をはじめとする、たくさんの兵が一戦を交えて、命をそこで落としています。でもそんなことを知らずに来た人にとっては、まだそこは夏草が一面生い茂る野原に過ぎないのかも知れません。しかし、その歴史的なことを知っていると、その夏草に、野原に、当時の事というのが重なって見えてきます。この句も芭蕉が昔を偲んで作った句なんですけれども、でも、今現代と重ね合わせると、またいろんな意味合いを持ってくると思うんですね。私たちの今日、ITバブルも世界的な不況も、総選挙も、もう後の世の人たちから見ると、兵どもが夢の跡、になってしまうのかも知れません。人の世の無常というものを歌った一句だと思います。

「海になるために急げり夏の川」

山に沸き出でた水が、最後に辿り着く場所というのが、海です。夏の川を歌ったこの句は、同時に作者の人生観も歌っ



ていると思います。大海を目指して、一心に下っていく流れ。川は海に注ぎ込んで、遂には海と一体となる。海というのは、あらゆる、どんな流れも受け止めて、そして、命を育む、母なる海ですね。そして、それもやがては水蒸気となって、雲となって、雨となって、降り注いで、再び山へ戻っていく。そういう、大きな情感を歌った句だと思います。森は海の恋人という、有名な自然保護活動がありますけれども、まさに、水の循環というのは、命の循環そのものののだと思います。

実は私は、今月のはじめに、山形県の最上町というところで、日本再発見塾という、私が主宰している塾を開催してきました。今回は水をテーマに、2日間塾を開いて、北は北海道から、南は熊本までの参加者が250人集まって、水について考える2日間だったんです。その中で、初日の一番最初の講義のときに、地元のお年寄り、炭焼きですとか、熊撃ちをしているお年寄り4人の方から、最上での暮らしについてのお話を伺いました。最上は「清

水（すず）」と皆さんが呼ぶ、水の豊かなところなんですけれども、そのお話を聞いている中で、私がとっても驚いたのが、その4人の方全員が、ペットボトルの水を一度も買ったことがない、ということでした。都会に住んできると、ペットボトルの水を買う、というのは日常のことなんですね。今でも、ペットボトルの水を買ったことがない人がいる、ということに大変驚いたんですけれども、その一方で、都会では、水のソムリエという資格があるんだそうです。ワインのソムリエじゃないんです。ミネラルウォーターの飲み比べをする、利き水っていうんでしょうかね。そのミネラルウォーターのソムリエという資格も出てきているんだそうです。同じ日本の中で、一度もペットボトルの水を買ったことのないお年寄りがいる。そして一方で、水のソムリエがいる。高い水は一本何千円もするんですね。シャンパーニュくらいの値段がする水を買って飲んで楽しんでいる人もいます。このギャップは、一体何なのか。非常に驚きました。そういうときに、おばあさんの一人がおっしゃったことが、非常に印象的でした。昔は大変不便だった、不自由だった、いろんなことが大変だった。あの頃から比べたら、今は夢みたい、とおっしゃったんですね。でも、夢をつかんだ今、私たち現代人は、ガソリンよりも高いお金を出して、ペットボトルの水を買っている。裏山に行けば、ただで、とても美しい豊かな水が飲める生活と、一本何千円もする水を買う生活と、一体どちらが豊かなのかと、その時に思いました。そんなことがあった、最上町での今年の、今月の初旬の経験でした。

「神田川祭の中をながれけり」

これは、東京の神田川の句です。祭りの賑わいの中を、神田川がいつものように流れている。ハレの象徴がお祭りだとす



ると、ケの象徴として、日常流れている神田川がある。祭りの日もそうでない日も神田川というのは、人の暮らしの真ん中を、東京の人の暮らしの真ん中を流れているわけなんですけれども、そんな人の暮らしと、自然の関係を、静かに描いた、とても余情の深い一句です。

「桐一葉日当りながら落ちにけり」

これは、高浜虚子の有名な一句です。桐の葉が枝から離れる瞬間を活写した一句です。桐の葉は、やがて落ちて土に還って、新しい命を育み、その大地の一部になっていくわけです。日に輝きながら落ちて

いくその桐の葉っぱというのは、あたかも神の祝福を受けているかのように見えます。この句も、命の循環を歌った一句です。



そして最後の一句。これも3Rのお手本のような一句ですけれども、良寛の句です。

「焚くほどは風がもてくる落葉かな」

諸国行脚の旅を終えた良寛が、故郷の新潟に戻ります。そして、国上山に五合庵というのを建て、庵で清貧の暮らしを



最後まで貫くんですね。この句は、長岡藩主が、寺を建ててあげるのでは是非来てくださいと良寛を招聘した時に、その申し出に対する返事として、良寛が詠んだ一句だそうです。何か焚こうと思えば、焚くくらいの落葉は風が運んでくれます。自分にはこの小さな庵で充分です、ということはこの句で言って、立派な寺を建ててあげるのそこに来なさいよ、という藩主からの申し出を断ったという句です。

いまざっと俳句を見ていただきましたけれども、このように、俳句を作ってますと、俳句を作る中で、対象、自然ですね。自然と向き合う、その自然を通して、自己の深部、普段日常では気がつかない、自己の深い部分と出会うような、そんな感じがあります。それから二つ目に、俳句っていうのは、瞬間を切り取るものなんですけれども、先ほどの、「桐一葉日当りながら落ちにけり」っていうのもまさにそうですね。本当に桐一葉が、枝から離れる瞬間を詠むものなんですけれども、その一句に詠むことで、鼓動する地球、その瞬間を切り取ることになります。そして、そうすることで、自分も宇宙と、宇宙の根源へ繋がっていくような、そんな感じがあります。そして三つ目に、俳句を詠んでいると、命と命の交感が生まれます。何度も、先ほどから俳句の中に出てきていますが、春の山と人が交感する、呼応していく。そういう感じがあります。そして、自然と人間が、双方向の関係になっていくんですね。普通は例えば桜なら、桜は一方的に美しく咲き出でて、私たちを楽しませてくれますけれども、そこで桜の花を詠むことで、たった一週間か二週間かの短い桜の命を、俳句という器に永遠に宿す。それによ

って、桜と人の関係に、双方向の関係が生まれていく。それが、俳句だと思います。

私は俳句の活動をいろんなところでやっていて、俳句で村おこしとか町づくりという、いろいろな地域づくりに関わっているんですけれども、岩手県の葛巻町というところでも、7年前から、俳句で町づくりというのをやっています。あそこは、とっても風の強い町で、風害が非常に厳しかったんですけれども、その風を味方にしよう、ということで、日本の中でも先駆けて、クリーンエネルギーを始めた所です。どうせ風を作るなら、文化の香りのする風を作りたい、という発想の元に、この俳句募集というのが始まりまして、「風」というのをテーマに、全国から、全世界から、毎年俳句を集めているんですね。その優秀賞に選ばれた句を、葛巻の木を使って、句碑をいろんなところに建てていく。葛巻の人口は8,000人くらいで、牛の数の方が人口よりも多いんですけれども、自分の句碑を建ててもらった人たちが、自分の句碑を見たくて、何度も何度も訪れる。友達とか家族を連れて、何度も訪れる。そういうことで、2次人口が非常に増えている町です。そこの町の人たちが素晴らしいのは、俳句の募集を年に1回のイベントで終わらせていないんですね。せっかく黛さんと呼んで俳句募集始めたんだから、自分たちももっと俳句について知ろうということで、自主的に俳句の勉強を始められました。町の方たちがおっしゃったことで、とても印象的だったのが、今まで何にもない何にもないと思っていた自分たちの町が、日常の目の他に、俳句を詠む目、表現する目という目を持って、その目を通して見てみたら、実は宝の宝庫であったことに気づいたということです。夜になれば、満天の星が出る。白樺林、ブナ林。もう俳句を詠もうと思えば、春夏秋冬、素晴らしい自然が山のようにあると。そういうことに、表現する目を通して気がついた、ということをおっしゃいました。これは私はとっても大事なことだと思います。

先ほど言いましたけれども、俳句を作っていると、私たち人間も、ひととものすみれと同じなんじゃないかなというところにいつも至ります。人間だけの地球ではないんだという思いがいつもします。こういう気づきが、3Rへの精神に繋がっていくのではないかと思います。

ある学者の方が、こんな映像を作ったそうです。ダイナミクスという言葉なんですけれども、私たちが生活している社会の下に、文化芸術がある。そ

してその文化芸術を支えているのは、風土である。その三つが循環している、そのダイナミズムをダイナミクスという映像を作って表現されました。物理学者で俳句を嗜んでいた、寺田虎彦という人は、俳句がある限り日本は滅びない、という風に書き残しています。これを言い換えれば、俳句が詠める日本であり続ける努力を、私たちはしていかなければいけない、ということなんではないでしょうか。松尾芭蕉は、夏炉冬扇という有名な言葉を残しました。余が風雅は夏炉冬扇のごとし。風雅は俳界のこと。夏炉というのは、夏の囲炉裏。冬扇というのは、冬の扇のことです。要するに、夏に囲炉裏はいらないですし、冬に扇はいらないですね。実用ではないものの象徴を言っています。自分の俳句なんて何の役にも立たない。要するに生きていく上では、俳句がなくたって、生きていける訳ですけども、でも、その裏には、俳句というのは、実用の役には立たないけれども、実用の何物にも代えられない、人が人として生きていく上で、より豊かに生きていくために、とても大切な、欠かせないものなのだという、芭蕉一流の教示が込められていると思います。実用ばかりを、効率化ばかりを追求して、優先してきた現代社会ですけども、この言葉は、そんな今の私たちの現実に、大きな問いかけをしているような気がします。こういった日本独自の、昔から日本人が持ってきた精神、夏炉冬扇のような精神を、今一度思い出して、循環社会の、世界のトップランナーを目指していきたいなと思っています。

時間になりましたので、この辺で話を終わらせていただきたいと思います。大変拙い話でしたが、最後までご静聴ありがとうございました。

●歓迎アトラクション



山形県立山形西高等学校合唱団

～曲名～

♪ 青い鳥

♪ 寂庵の祈り

♪ 最上川



出羽三山神社山伏

●大会宣言

東根市立高崎小学校児童

高崎小学校は、山形県中央の東根市西部の、とても豊かな自然に囲まれたところにあります。学校近くの里山一帯を学びの場にしようという夢があり、地域の方々と連携した「キッズドリームランド祭り」の開催や炭焼体験、散策道整備などの環境活動に取り組んでいます。平成17年には、緑の少年団全国大会で「緑の奨励賞」を受賞し、今年6月には、これまでの取り組みが評価され「環境やまがた大賞」を受賞しています。



東根市立高崎小学校6年生による大会宣言

わたしたちは、豊かな自然に学び、ふれあい、『キッズドリームランド』の取り組みを続けて行きます。

緑の山、清らかな川、自然のなかで地域とふれあい、そして学ぶ。

この豊かな自然を守るため、『さくらんぼ環境ISO』を推進していきます。

『ごみをできるだけ出しません。』『なるべく繰り返し使います。』『捨てるときはリサイクルできないか考えます。』

わたしたちは『もったいない』をいつも心がけ、みんなで3R活動に積極的に取り組みます。

そして、豊かな自然を守り、未来に贈ります。

3.開催イベント

●やまがた環境展

■日程……………10月24日(金) ～ 10月26日(日)

■会場……………山形ビッグウイング

■入場者数……45,249人 (24日(金) 5,532人
25日(土) 13,786人
26日(日) 25,931人)

■オープニングセレモニー

谷津龍太郎環境省廃棄物・リサイクル対策部長と荒木由季子山形県副知事の挨拶に続き、星幼稚園の子どもたちが太鼓演奏を行い、主催者と関係団体の代表らがテープカットを行った。



■大場満郎 講演会

■日程……………10月24日(金) 11:30 ～ 12:30

極地冒険や現在取り組んでいる「地球縦回り一周の旅」などの経験で感じた地球温暖化の実態を報告。「今までは想像もつかないことだったが、グリーンランドでは5月に雪がなくなってしまった。ホッキョクグマの生息域が狭まっている。地球温暖化は北極圏の動植物に変化を与えており、何とか止めなくてはならない」などと訴えた。



■3R活動先進事例発表会(主催: 3R活動推進フォーラム)

■日程……………10月25日(土) 10:30～12:00

家庭のごみの減量化や企業における3Rの推進など東北各地で行われている取り組みのうち、平成19年度に循環型社会形成推進功労者等表彰を受けた事例の発表が行われた。

1. 株式会社エコリサイクル 山口潔實氏
2. 北上製紙株式会社 沓澤義治氏
3. 今野利夫氏(個人)
4. 特定非営利活動法人 資源循環型社会発信地域創造グループ(エッグ) 柏谷弘陽氏
5. 特定非営利活動法人 循環型社会創造ネットワーク 類家伸一氏



■環境関連製品・環境技術の展示 ～全国から環境にやさしい製品が大集合～

- 山形県リサイクル認定製品、認証システムの紹介
- マイバッグ・マイ箸づくり体験
- 木工玩具づくり体験
- リサイクル自転車が当たる抽選会
- バルーンアート・ポップコーンのプレゼント
- 自動車分解リサイクルの展示
- エコドライブ体験
- エコカー展示

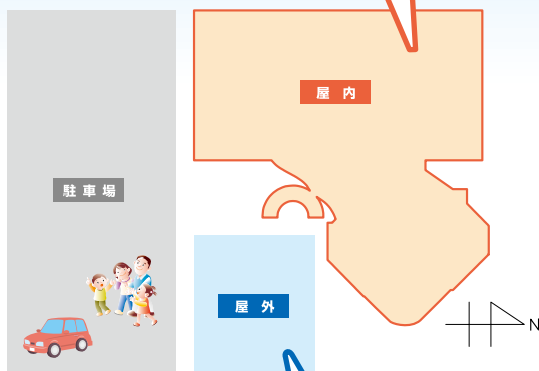
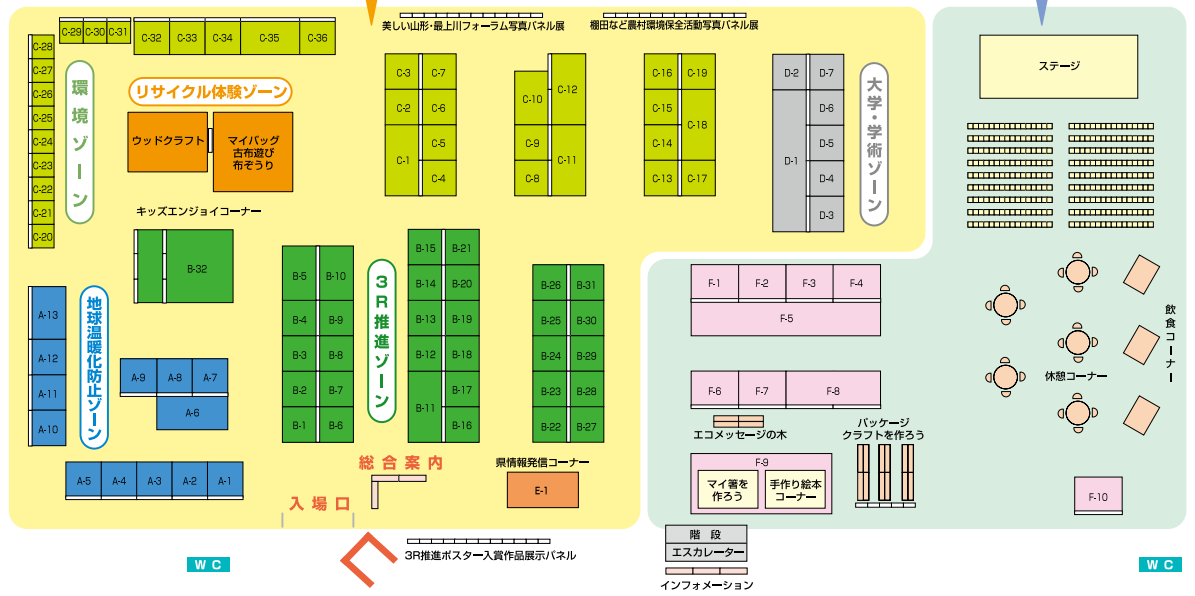


●やまがた環境展 レイアウト

屋内レイアウト

やまがた環境展

エコライフやまがた'08



屋外レイアウト



	県外企業・団体	県内企業・団体	行政団体ほか	計
企業・団体数	25	47	28	100
ブース数	27	50	34	111



■やまがた環境展 屋内出展者一覧

	NO	出展者名	出展の概要
地球温暖化防止ゾーン	A-1	山形県地球温暖化防止県民運動推進協議会	1人1日1kg CO ₂ 削減!家庭のアクションの紹介、普及
	A-2	山形県環境企画課	
	A-3	(社)日本自動車販売協会連合会山形県支部	環境マイスターなどグリーン購入の取組みの紹介
	A-4	山形県電機商業組合	
	A-5	村山地域地球温暖化対策協議会	太陽光発電システム・次世代省エネ住宅の紹介
	A-6	山形県地球温暖化防止活動推進センター	省エネ家電の紹介
	A-7	(株)モス山形	屋上緑化、壁面緑化、折板屋根の緑化システムの紹介
	A-8	デジタル情報開発(株)	ルミシスと材料とした製品の展示、ルミシスによる塗り絵体験実施
	A-9	環境省東北地方環境事務所	チームマイナス25%のめざせ1人1日1kg CO ₂ 削減!私のチャレンジ宣言・エコトランプの紹介
	A-10	(株)四季の住まい	GE Oパワーシステムの紹介
	A-11	(株)タカバシ電工	エコキュート・太陽光モジュール(展示機)の展示
	A-12	(株)多利加	京セラ太陽光パネル展示、IHエコキュートなどのオール電化推進商品の紹介
	A-13	(株)アモック東日本設備	太陽電池、エコキュート・IHエコキュート・エコキュート・エコキュートの紹介
3R推進ゾーン	B-1	(株)サニックス	環境関連機器や技術、循環型社会推進事業の紹介
	B-2	(株)ケーイーコーポレーション	コンテナ修正機(モデル)の展示
	B-3	(株)岩井化成	エコマーク商品の展示や当社リサイクル方式の紹介
	B-4	(株)新生ゴム	タイヤを原料としたリサイクル製品の展示、マテリアルリサイクルの工程をビデオで紹介
	B-5	日本施設(株)	紫外線光触媒脱臭装置や紫外線殺菌装置の展示
	B-6	(株)クレハ環境	処理困難物の適正処理と環境修復事業に関するパネル展示
	B-7	補助工業(株)	レジ袋toレジ袋 リサイクルシステムの紹介
	B-8	日本グリーンボックス(株)	ごみ有料化指定袋流通ソフトの紹介
	B-9	中部エコテック(株)	生ごみ等の急速発酵処理機の展示
	B-10	サンキョウリサイクル(株)	産業廃棄物・廃ランプ類のリサイクルの仕組みの紹介、リサイクルされた高品質のガラスカレットやガラス製品の展示
	B-11	(株)ヨコタ東北	食品トレイのリサイクルシステムの紹介、容器フィルム剥がし体験実施
	B-12	やまがたグリーンパワー(株)	バイオマス発電の仕組みをビデオで紹介、ガス化発電システムの紹介パネルや木質チップサンプルの展示
	B-13	バイオソリッドエナジー(株)	脱水汚泥燃料化事業をビデオやパネルで紹介
	B-14	(株)クリーンシステム	リサイクル製品の紹介(R・P・F、原料チップ、燃料チップ、オガコ、R・C・A・O)
	B-15	(株)環境総合技術センター	生ごみのリサイクルシステムをビデオやパネルで紹介
	B-16	(株)最上機工	廃プラが油に変わる仕組みをパネルで紹介、再生された油製品の展示
	B-17	(有)トータルシステム	小型・軽量・省エネ・低価格のBDF生成装置の展示
	B-18	(株)森環境技術研究所	高含水比土質リサイクルシステム(ポンタラン工法)の展示・紹介
	B-19	(株)丹野	リサイクル製品「エコたいり」の展示・紹介
	B-20	山形酸素(株)&(株)ASON	東ソーフッ素樹脂システムや超硬肉質粉砕研削の再生加工品、超硬成形機材の展示・紹介
	B-21	第一産業機械(株)	生ごみ処理機「バイオクリーン」バイオトイレウットボイラーの展示・紹介
	B-22	(有)輝滋	環境改善型浄水器・電気変換装置の展示
	B-23	(株)シンダー	廃プラを原料として油化装置で油を作る実演やパネルによる活動紹介
	B-24	上山製紙(株)	リサイクルドレインペーパーの展示、包装紙(水油紙)の油解・デモンストレーション実施
	B-25	羽後環境工業(株)	秋田県産リサイクル製品である秋田杉の廃木材、間伐材を利用した生炭(木炭)の展示
	B-26	(株)佐藤建設東北支店	秋田県産リサイクルコンクリート製品研究会の紹介
	B-27	有原責任中興法人パワコン3R推進センター	リサイクルチップを原料としたウッドクリート(木質舗装材)などの製品やパネル展示
	B-28	山形県循環型社会推進課	パネンなどによる山形県リサイクルシステム認証制度の紹介
	B-29	山形県環境型社会推進課	パネンなどによる山形県リサイクル製品認証制度の紹介
	B-30	山形県農政企画課	県内バイオマスタウンの取組みの紹介
	B-31	東北バイオマス発見活用協議会	東北地域のバイオマス利活用の取組みの紹介
	B-32	(社)山形県産業廃棄物協会	環境クイズやリサイクル自転車抽選会の実施
環境活動・啓発ゾーン	C-1	イオンリテール(株)東北カンパニー	イオン温暖化防止宣言のもと「店舗での省エネ・創エネ」活動の紹介
	C-2	大塚製薬(株)	H19環境大臣賞最優秀賞を受賞したボカリスエットエコボトルの紹介、環境クイズの実施
	C-3	環境省東北地方環境事務所	3R・野生生物・国立公園の紹介
	C-4	(株)ローソン	「緑の募金」活動の紹介、エコクイズの実施
	C-5	NECセミコンダクターズ山形(株)	環境活動の紹介パネルの展示、工場見学疑似体験の実施
	C-6	山形東亜DKK(株)	環境大気分析計・水質分析計の展示、紹介
	C-7	日本地下水開発(株)	無散水消雪施設や土壌浄化対策・環境アセス事例の紹介
	C-8	山形スリーエム(株)	3R及び環境設備に関するパネルや環境配慮型製品の展示
	C-9	酒田リサイクルポート推進協議会	協議会や酒田臨海工業団地立地企業の3R推進活動の紹介やパネルの展示
	C-10	(社)食品容器環境美化協会	新しいまち美化手法「アダプトプログラム」や環境美化教育支援の紹介
	C-11	3R推進団体連絡会	容器包装リサイクルに関する3R推進普及パネル等の展示
	C-12	(株)NTTドコモ東北支社	携帯電話の回収リサイクルを通じた資源の有効活用と環境負荷低減を紹介(環境省と協力した携帯電話回収活動展開)
	C-13	(財)産業物研究財団 3R活動推進フォーラム	3Rの普及・調査・研究事業の紹介
	C-14	猛禽類保護センター	猛禽類保護のための活動事例やイヌシの生態環境の紹介

	NO	出展者名	出展の概要
環境活動・啓発ゾーン	C-15	鶴岡市	ラムサール条約湿地登録予定の上池・下池の紹介
	C-16	山形県みどり自然課	県民みんなで支える新たな森づくり事業の紹介
	C-17	山形県庄内総合支庁環境課	海岸漂着物の現状や取組み活動の紹介、漂着物トランクミュージアムの展示
	C-18	山形市	レジ袋削減に向けた取組みやごみ減量・もったいないねっと山形の活動の紹介
	C-19	(株)大風印刷	FSC認証紙や環境対応印刷の紹介
	C-20	山形県環境保全協議会	山形県環境保全推進賞の紹介
	C-21	NECセミコンダクターズ山形(株)	平成11年度山形県環境保全推進賞知事賞受賞の取組み等の紹介
	C-22	(株)ヨコタ東北	平成13年度山形県環境保全推進賞知事賞受賞の取組み等の紹介
	C-23	東北エプソン(株)	平成14年度山形県環境保全推進賞知事賞受賞の取組み等の紹介
	C-24	NECパーソナルプロダクツ(株)米沢事業所	平成14年度山形県環境保全推進賞知事賞受賞の取組み等の紹介
	C-25	(株)山形富士通	平成15年度山形県環境保全推進賞知事賞受賞の取組み等の紹介
	C-26	山形サンケン(株)	平成16年度山形県環境保全推進賞知事賞受賞の取組み等の紹介
	C-27	(株)東根新電元	平成17年度山形県環境保全推進賞知事賞受賞の取組み等の紹介
学術・大学ゾーン	C-28	山形カシオ(株)	平成17年度山形県環境保全推進賞知事賞受賞の取組み等の紹介
	C-29	(株)小森マシナリー	平成18年度山形県環境保全推進賞知事賞受賞の取組み等の紹介
	C-30	学校法人金山学園めばえ幼稚園	平成19年度山形県環境保全推進賞知事賞受賞の取組み等の紹介
	C-31	(株)山形ケンウッド	平成19年度山形県環境保全推進賞知事賞受賞の取組み等の紹介
	C-32	NPO北日本木材資源リサイクル協会	マテリアル・サーマルそれぞれのリサイクルの現状をパネル等で紹介、リサイクル製品展示
	C-33	NPO山形県解体工事業協会	ゼロエミ実現に向けた3R調査研究と普及啓発のパネル展示
	C-34	山形県循環型社会推進課	H19わたしがつくったマイバック環境大臣賞応募作品の展示、紹介
	C-35	山形県消費生活団体連絡協議会・山形県婦人連盟	古布を使ったアクセサリーの展示や草履作り・傘を使ったマイバック作り体験実施
	C-36	山形県警察本部	夜光反射材付エコバッグや啓発パネルの展示
	D-1	山形大学地域共同研究センター	環境に関する教育や研究活動の紹介(有用資源の飼料化・最上川水質改善、木質資源のリファイナリー技術など)
	D-2	東北芸術工科大学	大学が推進、提唱する3R、環境をテーマとした研究内容・活動の紹介
	D-3	東北公益文科大学	大学が推進、提唱する3R、環境をテーマとした研究内容・活動の紹介
	D-4	慶應義塾大学先端生命科学研究所	オイル産生菌・バイオプラスチック・食品・医療分野の基礎研究紹介(パネル&P.C)
	D-5	(独)産業技術総合研究所	施設衛生農家等で利用可能な木粉と廃プラから製造したクリーン固形燃料の紹介
	D-6	(財)山形県産業技術振興機構	有機エレクトロニクス等の先進的研究開発事業の紹介
	D-7	山形県工業技術センター	廃タイヤのリサイクル技術や豆腐製造副産物からのポリフェノール抽出技術等の紹介
E-1	山形セレクション おいしい山形推進機構 やまがた観光キャンペーン推進協議会	山形セレクションや観光物産の紹介	

■やまがた環境展 屋外出展者一覧

NO	出展者名	出展の概要
G-1	山形県サッシ・ガラス(協)	移動体感車「ガラスの森」によるエコガラスの紹介
G-2	(株)エムエスデー	BDF生成装置の展示、生成実演
G-3	山形ガス(株)	天然ガス車の展示
G-4	山形県警察本部	交通安全ゆとり号による運転適正検査体験実施
G-5	ソーラーワールド	太陽光発電、風力発電、ソーラーカー、散水セットなどの自然エネルギー機器の実演
G-6	(株)山本製作所	木質パレットストープ展示・実演
G-7	(協)山形ウッドエネルギー	木質パレットストープ展示・実演
G-8	山形県村山総合支庁河川砂防課	鉾山ダムから発生した粘土で作った「鉾管」や3Rモデル工場の紹介・展示
G-9	山形県立東根工業高等学校	電気自動車の展示
G-10	(社)日本自動車販売協会連合会山形県支部 (株)山形県自動車販売店リサイクルセンター	解体自動車の展示、エコドライブ体験

■エコライフやまがた'08出展者一覧

NO	出展者名
F-1	山形市
F-2	富士通(株)
F-3	(株)テサキ製作所
F-4	山形大学
F-5	東北電力(株)山形支店
F-6	日東ベスト(株)
F-7	シナリー
F-8	藤庄印刷(株)
F-9	やまがたマイ箸クラブ
F-10	日本たばこ産業(株)



●地域循環圏を考えるシンポジウム 環境省中央環境審議会循環型社会計画部会

■日程……………10月23日(木) 13:30～17:00

■会場……………ホテルメトロポリタン山形 4F「霞城」

■入場者数……164人

山形県では、リサイクルなど3Rの推進による資源循環型社会の形成を目指しているが、県内各地においても、NPOや市民団体などの多様な主体とその連携により、地域の特色を活かした独創的な循環システムが広がってきている。

3R推進全国大会が本県で開催される機会を捉え、新循環型社会推進計画による地域循環圏や国際的視点による資源循環についての講演、本県の優れた循環システムの事例発表などを通じて、地域の連携による資源循環のシステムづくりを推進するため、シンポジウムと中央環境審議会を合同で開催した。

■地域循環圏を考えるシンポジウム



【基調講演Ⅰ】

「地域の力を活用した循環型社会づくり～地域循環圏の構築に向けて～」

環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部企画課
循環型社会推進室長 大森恵子氏



【基調講演Ⅱ】

「3Rに向けて～OECDの展望」

OECD環境局国内政策課長 トム・ジョーンズ氏

■環境省中央環境審議会循環型社会計画部会(主催:環境省)

【取り組み事例の発表】

◇テーマ 「地域における循環型社会づくり」

◇進行 ジャーナリスト・環境カウンセラー 崎田裕子氏

◇発表者

・レインボープラン(市民と行政との連携による循環システム)

長井市／レインボープラン推進協議会

・食品トレーリサイクル新庄方式(福祉施設等との連携による市民リサイクルシステム)

株式会社ヨコタ東北(P&Pトレーリサイクル研究会)

・金山町・菜の花プロジェクト(幼稚園発、持続可能な町づくり)

学校法人金山学園めばえ幼稚園(かねやま新エネルギー実践研究会)

●エコツアー

■日程……………10月25日(土)

①山形市内半日コース(参加人数15人)

8:50 出発 / JR山形駅東口バスターミナル
 ↓
 9:00 ~ 9:40 / 七日町商店街(BDF製造)見学(山形市)
 ↓
 10:00 ~ 11:00 / 山形市浄化センター見学(山形市)
 (バイオガス発電・下水汚泥コンポスト化ほか)
 ↓
 11:30 ~ 12:30 / 昼食…山寺(山形市)
 ↓
 13:00 / 山形国際交流プラザ(ビッグウイング)
 ↓
 13:30 到着 / JR山形駅東口バスターミナル



七日町商店街(BDF製造)



山形市浄化センター

②最上地域1日コース(参加人数21人)

8:40 出発 / JR山形駅東口バスターミナル
 ↓
 10:00 ~ 10:40 / やまがたグリーンパワー見学(村山市)
 ↓
 11:30 ~ 11:50 / たんぼぼ作業所見学(新庄市)
 ↓
 12:00 ~ 12:20 / 友愛園見学(新庄市)
 ↓
 12:30 ~ 13:10 / 昼食(新庄市)
 ↓
 13:20 ~ 14:20 / ヨコタ東北見学(新庄市)
 ↓
 14:50 ~ 15:50 / 最上川舟下り《古口～草薙》(戸沢村)
 ↓
 18:15 到着 / JR山形駅東口バスターミナル



やまがたグリーンパワー



たんぼぼ作業所



友愛園



ヨコタ東北



最上川舟下り

●映画「アース」上映会

■日程……………10月25日(土)

①10:30 ~ 12:15 (開場10:00)

②17:30 ~ 19:15 (開場17:00)

■会場……………山形ビッグウイング 大会議室

■入場者数……①184人 ②191人



4. 関連イベント

●もったいないやまがた780大会

■主催……………山形県、ごみゼロやまがた推進県民会議

■おもちゃの「かえっこバザール」&環境科学体験コーナー

■日程……………10月25日(土) 10:00～17:00、10月26日(日) 10:00～16:00

■会場……………山形ビッグウイング 交流サロン



かえっこバザール



手回し発電グランプリ



空気砲で遊ぼう

■3R推進シンポジウム

■日程……………10月26日(日) 13:30～16:30

■会場……………山形ビッグウイング 大会議室

【基調講演】

「地球と友だちになろう ～今、私たちにできること～」

松田美夜子氏(内閣府原子力委員会委員)



【パネルディスカッション】

◇テーマ 「ごみゼロやまがたの実現に向けて」

◇コーディネーター／高木武夫氏(東北公益文科大学教授)

◇パネリスト／荒澤宏二氏(新庄市環境課環境保全室長)

樋口幸一氏(白鷹町町民税務課課長補佐)

村上奈美子氏(高畠町住民生活課環境推進室主査)

峯崎郁実氏(エコ・キャンパス推進委員会)



●こども環境学習教室

■日程……………10月26日(日)

1回目／10:30～11:30 2回目／13:30～14:30

■会場……………山形ビッグウイング 研修室

■主催……………山形県



ソーラークッカーを作ってみよう
(東北エプソン株式会社)



電気エネルギー教室
(東北電力株式会社山形営業所)



パソコンの3Rを体験
(富士通株式会社)

●こどもエコクラブ交流会inやまがた

■日程……………10月25日(土) 13:00～15:00

■会場……………山形ビッグウイング 研修室

■主催……………山形県

- ・エコクラブの仲間と交流しよう
 - ・シャープ「エコ」な実験をしてみよう
- 講師:シャープ環境安全本部環境社会貢献部



●エコ杯やまがた

■日程……………10月25日(土) 10:30～16:20

■会場……………山形ビッグウイング 中会議室

■主催……………エコ杯やまがた実行委員会

■「エコ杯やまがた」地方大会

ノミネートされた5団体によるプレゼンテーションが行われ、審査と投票により、「エコ杯 やまがた 大賞」に山形県立置賜農業高等学校が決定した。

◇ノミネート団体(エントリー順)

- ・環境と経済が融合した持続可能な町づくり。
かねやま新エネルギー実践研究会 & めばえ幼稚園(金山町)
- ・MOTTAINAIプロジェクト
山形県立置賜農業高等学校(川西町)
- ・庄内環境マネジメント研究会 ～企業間の壁を取り払った『省エネパトロール』～
庄内環境マネジメント研究会(酒田市)
- ・環境と福祉がつながりサイクルの環『食品トレーリサイクルシステム 新庄方式』
株式会社ヨコタ東北(新庄市)
- ・目標 自給率50%！『ぼくたちの作った野菜が給食に』
高畠町立二井宿小学校(高畠町)



■講演会

- ・「温暖化を止められないと何が起きるか？」
高橋潔氏(国立環境研究所 地球環境研究センター 主任研究員)
- ・「バイオ燃料大量生産システムの実用化に向けて」
～水の中のオイル生産植物・微細藻を利用する～
伊藤卓朗氏(慶応義塾大学 先端生命科学研究所 研究員)



●東北バイオマス研修会 in 山形

～地域に根ざした環境バイオマスの普及に向けて～

■日程……………10月25日(土) 13:30～17:00

■会場……………山形ビッグウイング 大会議室

■主催……………東北バイオマス発見活用協議会

【基調講演】 ・「バイオマス利活用の推進と地域づくりの可能性」

大川健嗣氏(山形大学名誉教授、山形短期大学教授)

・「バイオマス・地域資源を土台とした農山漁村の活性化」

結城登美雄氏

【研 修 会】 ・「バイオマスタウンの策定とバイオマス利活用について」

株式会社循環社会研究所

・事例「ワインの搾りかすを家畜のエサにリサイクル」

～未利用バイオマスを活用したエコフィードステーション化の研究～

置賜“MOTTAINAI”研究会(山形県立置賜農業高等学校)

・事例「木質バイオマス利活用による農業用温風暖房機の導入」

株式会社山本製作所



●県内縦断エコドライブオリエンテーリング

■日程……………10月26日(日) 9:00～16:00

■主催……………社団法人日本自動車販売協会連合会山形県支部

【家族や仲間と一緒にエコドライブを体験(県内4コース)】

同じ道を行きは普通の運転、帰りはエコドライブで走行し、燃料消費量の違いでエコドライブの効果がどの程度あったかを検証した。途中のチェックポイントでは環境に関するクイズやダム施設見学、木工クラフトなども行われた。

●参加台数:131台(参加者総数:430名)

山形発85台/酒田発32台/米沢発7台/新庄発7台

●燃費削減率

全体平均 **18.66%** 燃費改善

●燃費改善上位3台

〈1位〉39.04% 〈2位〉38.42% 〈3位〉35.36%



●エコライフやまがた '08

- 日程……………10月24日(金) ～ 10月26日(日)
- 会場……………山形ビッグウイング
- 主催……………エコライフやまがた '08実行委員会

ステージイベント

■松木安太郎トークショー

- 日程……………10月25日(土) 13:00 ～

松木さんが自身のサッカー人生を振り返りながら「サッカーは誰でも熱くなれるスポーツ」、とその魅力や面白さを語った。また、地元のサッカー少年たちにシュートやパスの練習方法を指導した。

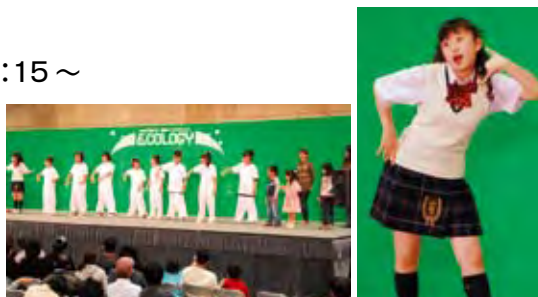


■ストロングマシン2号のダンスパフォーマンス

- 日程……………10月26日(日)

1回目 / 11:15 ～ 2回目 / 13:15 ～

中学生ながら卓越したダンステクニックで観客を魅了したストロングマシン2号さん。地元ダンススクールの生徒たちを交えたワンポイントレッスンも行われた。



■田中邦衛トークショー

- 日程……………10月26日(日) 12:00 ～

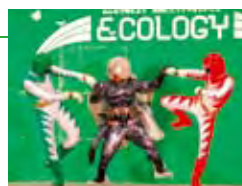
役者という職業の素晴らしさ、難しさなどを当時の経験談を交えながら語り、ときには劇中の名ゼリフを再現する一幕も。田中さんの温かい人柄が会場全体を包み込んだ。荒井幸博さんがコーディネーターを務めた。



■環境戦士大鍋宣隊イモレンジャーショー

- 日程……………10月26日(日)

1回目 / 10:30 ～ 2回目 / 14:30 ～



■環境絵本の読み聞かせ(今田裕美子さん)

- 日程……………10月25日(土) 14:30 ～

10月26日(日) 14:00 ～



屋外イベント

■フリーマーケット

■山形のおいしいものコーナー

■日本一の芋煮会による芋煮コーナー

■日程……10月24日(金)～10月26日(日)／イベント広場

■JA全農山形 秋の大収穫祭

■日程……10月26日(日)／国際交流広場



参加型イベント

■空き箱でパッケージクラフトを作ろう！

■日程……10月24日(金)～10月26日(日)

■世界でたった1冊の手づくり絵本

■日程……10月25日(土) 1回目／10:30～ 2回目／15:00～
10月26日(日) 1回目／10:30～ 2回目／14:30～

■オリジナルのマイ箸をつくろう！

■日程……10月24日(金)～10月26日(日)

■エコメッセージの木

■スタンプラリー



展示ブース

◇出展者一覧

- | | |
|---------------|--------------|
| ●山形市 | ●日東ベスト株式会社 |
| ●富士通株式会社 | ●シナリー株式会社 |
| ●株式会社テサキ製作所 | ●藤庄印刷株式会社 |
| ●国立大学法人山形大学 | ●やまがたマイ箸クラブ |
| ●東北電力株式会社山形支店 | ●日本たばこ産業株式会社 |



●シャトルバス

山形駅～山形ビッグウイング間 無料シャトルバスのご案内

山形駅～ビッグウイング間を1時間1往復運行します。

◆10/24 (金)、10/25 (土)

山形駅(東口)		ビッグウイング		山形駅(東口)
(1) 9:30	→	10:00	→	10:30
(2) 10:30	→	11:00	→	11:30
(3) 11:30	→	12:00/13:00	→	13:30
(4) 13:30	→	14:00	→	14:30
(5) 14:30	→	15:00	→	15:30
(6) 15:30	→	16:00	→	16:30
(7) 16:30(回送)	→	17:00/17:30	→	18:00

◆10/26 (日)

山形駅(東口)		ビッグウイング		山形駅(東口)
(1) 9:30	→	10:00	→	10:30
(2) 10:30	→	11:00	→	11:30
(3) 11:30	→	12:00/13:00	→	13:30
(4) 13:30	→	14:00	→	14:30
(5) 14:30	→	15:00	→	15:30
(6) 15:30(回送)	→	16:00/16:30	→	17:00

※臨時駐車場(山形市総合スポーツセンタースケート場前)も経由します。

〈乗車人数〉 24日(金) 107人
25日(土) 74人
26日(日) 74人



山形ビッグウイング前



山形市総合スポーツセンタースケート場前



山形駅東口

●託児サービス

◇託児サービス(無料)について

対象イベント

- 24日(金) 13:30～16:30
全国大会式典
- 26日(日) 13:30～16:30
3R推進シンポジウム

託児時間

上記イベントの開始30分前から
終了30分後まで

対象児童

0歳児から未就学児童まで



5.資料

●ポスター

山形で体感、新循環スタイル。

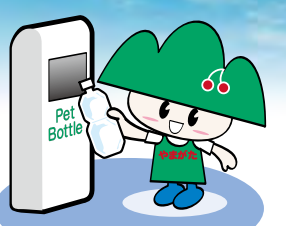
第3回 3R推進全国大会

平成20年 **10/23(木) ▶ 26(日)**
<http://3r-yamagata.jp> **入場無料**

詳しくは上記アドレスにアクセスしてください。



[リデュース]
Reduce
 発生抑制 減みをできるだけ出さない



[リサイクル]
Recycle
 再生利用 再び資源として利用する



[リユース]
Reuse
 再使用 使えるものは繰り返し使う

第3回 3R推進全国大会式典

日程 平成20年 **10/24(金)**
 開場/12:30 開会/13:30

会場 **山形ビッグウイング 大会議室**
◎循環型社会形成推進功労者表彰
 ◎3R促進ポスターコンクール表彰など
 主催/環境省、山形県、山形市、3R活動推進フォーラム

参加申し込み方法
参加者ご希望の方は、代表者の「氏名」「年齢」「住所・郵便番号」「電話番号」と参加者の「氏名」「年齢」を記入の上、FAXまたはEメールでお申し込みください。
 ●FAX: 023-627-1041 (山形新聞社広告局内)
 ●E-mail: info@3r-yamagata.jp

特別講演 **記念講演**


 小宮山 宏氏
(東証大学校長)


 黛 まどか氏
(環境省)

●申込期限 **10月10日(金) 必着**
※既に既にお申し込みのうえでお申し込みの受付を閉鎖いたします。
 ※定員に達した場合は募集定員に限りお申し込みをいただけない場合があります。あらかじめご了承ください。

■やまがた環境展
 日程▶ 10/24(金)▶ 26(日) 会場▶ 山形ビッグウイング
 ◎3R関連製品・環境技術の展示 ◎その他環境体験イベント

■地域循環圏を考えるシンポジウム
 日程▶ 10/23(木) 会場▶ ホテルメトロポリタン山形
 ◎基調講演 ◎中央環境審議会循環型社会計画部会

■もったいないやまがた780大会
 日程▶ 10/25(金)▶ 26(日) 会場▶ 山形ビッグウイング
 ◎3R推進シンポジウム ◎環境科学体験コーナー ◎おもちゃのかえりバザール

お問い合わせは
第3回3R推進全国大会実行委員会事務局
 山形県文化環境部循環型社会推進課内 〒990-8570 山形市松波二丁目8-1 TEL023-630-3044

[illegible]

(表)

各イベントの詳細や参加申込はホームページから▶

http://3r-yamagata.jp

23 地域循環圏を考えるシンポジウム 環境省中央環境審議会循環型社会計画部会

時間 13:30～17:00 会場 ホテルメトロポリタン山形

●講演要綱 「地域の特色を用いた地域循環圏づくり—地域循環圏の構築に向けて—」

「循環型社会の構築に向けてSDGSDGの観点からの議論」
ト・ムジョウズ 氏 (OIC 国際機関内務部長)

●国連省中央環境審議会 テーマ「循環型社会の構築を促す」
特別発表、基調レクチャーが実施される。レクチャー後、参加者同士のディスカッション

25 映画「ワース」上映会
時間 13:00・15:00 会場 山形ヒューマン・メディア・センター
料金 全席 400円（全席指定）

※参加申込は必須です

お問い合わせ 第3回全国大会実行委員会事務局

もったいない山形80大会

25 おもちゃの「えんこ宝庫」
26 環境科学体験コーナー

時間 25/日 10:00～17:00、26/日 10:00～16:00
会場 山形ヒューマン・メディア・センター
●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター
●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

26 3R推進シンポジウム
時間 13:30～16:30 会場 山形ヒューマン・メディア・センター

●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター
●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 東北バイオオマス研修会 山形
時間 13:30～16:30 会場 山形ヒューマン・メディア・センター

●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

26 こども環境学習教室 山形市立総合文化センター
時間 13:30～16:30 会場 山形ヒューマン・メディア・センター

●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

26 こども環境学習教室 山形市立総合文化センター
時間 13:30～16:30 会場 山形ヒューマン・メディア・センター

●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

26 こども環境学習教室 山形市立総合文化センター
時間 13:30～16:30 会場 山形ヒューマン・メディア・センター

●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

26 こども環境学習教室 山形市立総合文化センター
時間 13:30～16:30 会場 山形ヒューマン・メディア・センター

●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

26 こども環境学習教室 山形市立総合文化センター
時間 13:30～16:30 会場 山形ヒューマン・メディア・センター

●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

26 こども環境学習教室 山形市立総合文化センター
時間 13:30～16:30 会場 山形ヒューマン・メディア・センター

●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

26 こども環境学習教室 山形市立総合文化センター
時間 13:30～16:30 会場 山形ヒューマン・メディア・センター

●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

26 こども環境学習教室 山形市立総合文化センター
時間 13:30～16:30 会場 山形ヒューマン・メディア・センター

●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 エコツアー 全席40%OFF

●山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市内半日コース
時間 13:30～16:30 会場 山形ヒューマン・メディア・センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

25 山形市立総合文化センター 山形市立総合文化センター

第3回3R推進全国大会実行委員会事務局
〒980-4870 山形県北谷町三丁目 TEL:023-634-0044

第3回3R推進全国大会実行委員会事務局
〒980-4870 山形県北谷町三丁目 TEL:023-634-0044

(裏)

●大会式典プログラム



(表)



(裏)

●ホームページ



●第3回3R推進全国大会実行委員会設置要綱

(名称)

第1条 本会は、第3回3R推進全国大会実行委員会(以下「実行委員会」という。)と称する。

(目的)

第2条 実行委員会は、資源循環型社会の形成に向けて、より広範な3R活動推進を図ることを目的に開催する第3回3R推進全国大会(式典)と、「第3回3R推進全国大会やまがた環境展」をはじめとする他のイベント(以下「併催イベント」という。)の一体的な運営及びその調整等を図るために組織する。

(業務)

第3条 実行委員会は、次の業務を所掌する。

- (1) 第3回3R推進全国大会(式典)の開催に関すること
- (2) 併催イベントの開催に関すること
- (3) 前2号の一体的な運営・調整に関すること
- (4) 実行委員会の予算・決算に関すること
- (5) その他、関係機関・団体等との連絡調整に関すること

(組織)

第4条 実行委員会の委員は、別表に掲げる者をもって構成する。

(役員)

第5条 実行委員会に、次の役員を置く。

- (1) 委員長 1名
- (2) 副委員長 1名
- (3) 監事 1名

2 委員長は、山形県文化環境部長をもって充てる。

3 副委員長は、山形市環境部長をもって充てる。

4 監事は、山形県文化環境部環境企画課長をもって充てる。

(役員の責務)

第6条 委員長は、実行委員会を代表し、会務を総括する。

2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代行する。

3 監事は、実行委員会の会計事務を監査する。

(会議)

第7条 実行委員会の会議は、委員長が招集する。

2 会議の議長は、委員長をもって充てる。

(幹事会)

第8条 会務の円滑な運営を図るため、実行委員会に幹事会を置く。

2 幹事会については、委員長が別に定める。

(事務局)

第9条 実行委員会の事務を処理するため、山形県文化環境部循環型社会推進課内に事務局を置く。

(経費)

第10条 実行委員会の経費は、補助金、負担金、協賛金、その他の収入をもって充てる。

(解散)

第11条 実行委員会は、大会が終了し、決算の承認を得られたときに解散する。

(その他)

第12条 この要綱に定めるもののほか、実行委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

付 則

この要綱は、平成20年6月4日から施行する。

(別表) 第3回3R推進全国大会実行委員会 委員名簿

委員長	山形県文化環境部長	細谷 知行
副委員長	山形市環境部長	小関 幸一
委 員	環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部企画課長	紀村 英俊／金丸 康夫
〃	環境省東北地方環境事務所長	吉井 雅彦
〃	3R活動推進フォーラム専任理事	八木 義雄
〃	山形県商工会議所連合会常任理事	舟山 政紘
〃	山形県消費生活団体連絡協議会長	松岡 由美子
〃	社団法人山形県産業廃棄物協会会長	伊藤 正志
〃	社団法人日本自動車販売協会連合会山形県支部長	鈴木 吉徳
〃	山形県環境保全協議会長	鈴木 俊幸／小嶋 信一
監 事	山形県文化環境部環境企画課長	石川 耕三郎

